



## 「御用留」の性格と内容（五）

——武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討——

森 安 彦

### 目 次

はじめに ——史料論の一視点——

- 一 「御用留」の機能と成立
  - 二 上野毛村「田中家文書」と「御用留」
  - 三 享保五年～寛政六年「御用留」の検討
  - 四 寛政七年～文化四年「御用留」の検討
  - 五 文化四年～文政四年「御用留」の検討  
(以上一九号)
  - 六 文政四年～文政一三年「御用留」の検討  
(以上二二号)
  - 七 文政一三年～天保一二年「御用留」の検討  
(以上二二号)
  - 八 天保一三年～嘉永四年「御用留」の検討  
(以上二三号)
  - 九 嘉永五年～安政七年「御用留」の検討
- (一) 「御用留」の存在状況
- (二) 對外危機と治安強化

「御用留」の性格と内容（五）（森）

### (一)

- (1) 異国船渡来と敵重警備
- (2) 開港と社会経済変動
- (3) 永上金・調達金の上納
- (4) 「悪党」横行と関東取締出役

### (二)

- 世田谷領支配の動向
- (1) 領主井伊直弼に関する情報
  - (2) 大場与一の世田谷領代官就任
  - (3) 触次名主父子の「不正」と弾劾
  - (4) 上野毛村名主七左衛門の功績と褒賞
- 自然災害と小前騒動

### (三)

- (1) 六郷用水の渇水
- (2) 安政の大地震・大風雨・米価高騰
- (3) 江戸屋敷下肥の新仕法反対闘争
- (4) 宇奈根村処罰者赦免願いと瀬田村渡船騒動  
(以上本号、未完)

## 九 嘉永五年～安政七年「御用留」の検討

### (一) 「御用留」の存在状況

本章では、武州荏原郡上野毛村名主田中家文書の「御用留」のうち、嘉永五年（一八五二）から安政七年（一八六〇・万延元年）までの九年間の「御用状留記」等九冊と「諸事御用向留記 六」一冊の合計一〇冊を検討対象としたものである。<sup>(1)</sup>

この一〇冊の「御用留」の表題年月、表題、収載年月、収録項目数等を一覧表にしたものが第1表である。これによって判明するように、「諸事御用向留記 六」は安政元年（一八五四）一月から文久二年（一八六二）七月までの約九年間分の内容が収録されており、「御用状留記」が嘉永五年から安政七年（万延元）までであり、両者の間に二年間の「ずれ」があるが、ここでは収録の記載内容を検討の対象とした。

この時期の特徴としては、鎖国体制が崩壊し、開国和親・交易に踏み切り、世界の先進資本主義諸諸国に互したことである。

この時期を主導した政治家の一人が、本「御用留」の上野毛村を含む彦根藩世田谷領主でもあった井伊直弼であった。直弼は安政五年（一八五八）四月大老に就任し、五月に將軍継嗣問題に決着をつけ、六月に日米修好通商条約に調印、八月に「安政の大獄」とよばれる反対派の一掃を図ったが、万延元年三月三日「桜田門外の変」で横死した。

検討対象とした「御用留」には井伊家の冠婚葬祭に関する情報が詳細に記録され、大老就任に関しては、とくに領

第1表 嘉永5年～安政7年 武州荏原郡上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表 題	収載年月	収録項目	備 考
1	嘉永5年正月吉日	御用書筆記	嘉永5年正月～同年12月	109	
2	嘉永6年正月吉日	御用状留記	嘉永6年正月～同年12月	146	嘉永5年12月1項目含む
3	嘉永7年正月大吉祥日	御用諸向留	嘉永7年正月～同年12月	117	安政2年正月1項目含む
4	安政元年12月より	諸事御用向留記六	安政元年12月～文久2年7月	78	
5	安政2年3月大辰綴之	御用向留記	安政2年正月～同年12月	95	安政3年正月1項目含む
6	安政3年大辰綴之所也	御用状留記	安政3年正月～同年12月	86	安政元年12月1項目・安政2年12月1項目含む
7	安政4年正月大吉祥日	御用状留記	安政4年正月～同年12月	87	安政3年11月・12月の各1項目含む
8	安政5年正月吉日	御用状留記	安政5年正月～同年12月	96	
9	安政6年正月吉日	御用留記	安政6年正月～同年12月	87	安政5年11月1項目含む
10	安政7年正月吉日	御用状留記	安政7年正月～同年12月	154	安政6年12月2項目含む

民に触書が出され、「御上之御威光を以他所向  
 対しのさばり不礼法外之筋抔有之候<sup>②</sup>而ハ全  
 御為不宜<sup>③</sup>」と申し渡している。

さて、この「御用留」を記録しつづけた上野  
 毛村名主七左衛門は、寛政五年（二七九三）に  
 一六歳で名主役に就任し、安政六年（二八五九）  
 八一歳で現役のまま死去し、名主在職六六年に  
 及び、「御領分御百姓共龜鑑」として「帯刀御  
 免一本紙」の褒賞を与えられた。<sup>③</sup>

以下収録の記載内容を中心に検討してみたい。

## （二） 対外危機と治安強化

嘉永六年（一八五三）六月のペリー率いる黒  
 船が浦賀沖に乘入れ、開国をせまり、ついに日  
 本の鎖国体制が崩壊するという事件が、ここで  
 は「異国船渡来」という言葉で象徴されている。

「御用留」の中にはこの「異国船渡来」に関

する記事が豊富である。それは、ペリー来航に際して、井伊直弼は藩兵二〇〇〇人を動員して警備にあったからである。

そのとき、井伊家世田谷領二〇か村からも多数の郷夫や駄馬が動員された。それらの動員の記録と人馬に支給された賃金等に関するものが多い。

ついで「異国船渡来」の対外危機に乗じて国内で無宿・悪党の横行に対する治安強化や臨戦体制下の米の買占め等による米価高騰の取締等に関するものがみられる。以下簡単に年月順にその動向を追ってみよう。

(1) 異国船渡来と嚴重警備

嘉永六年「御用状留記」の六月四日には代官所から「相州表へ異国船到来之趣申来候、未タ急発之被仰出は無之候得共、兼而相達置候通り人馬共無差支様手配容易致置可申候」とあり、ペリ艦隊の到来を知らせている(六六項)。これを受けて同日世田谷上町名主宗八から、この件に関し翌五日程五ツ時に上町で「寄合之上相談可致旨」の回状が出されている(六六項)。翌五日夜には代官所から「相州表江出発被仰付候ニ付、明早朝相達置人馬御上屋敷ニ差出可申候、村役人上町江罷出可申候」との連絡あり(六七項)、六日七ツ時、代官所より桜田御台所へ「相州表急発御用非常御手当人足」二二人の差出しを命ぜられ、上野毛村からは一名を出している(六八項)。

八月五日には、異国船渡来につき莫太の物入となり勝手方不如意の折柄、質素儉約に励むよう彦根藩目付から「御屋敷御家中衆」への達書が記載されている(九〇項)。

八月二一日には野良田村与一右衛門より、「相州浦賀表<sup>五</sup>急発御用人馬之分昨廿日御褒美頂戴仕候」として、その褒美の割合方を相談したので集ってほしい旨の廻状が出ている(九五項)。

九月三日には代官所から「急発御用人馬高并其<sub>ニ</sub>御領分内<sub>ニ</sub>而人夫・駄馬等有之分御調<sub>ニ</sub>付、色々申上候様と御達し有之候」として、明朝上町へ出席するやうにとの廻状が出ている（二〇五項）。

一月一日には、異国船渡来の警備として彦根藩が江戸湾の大森辺の警備を命ぜられ、これまでの相州警備から解除された触書の写が次のように掲載されている（二三五項）。

写

御目付<sub>江</sub>

昨十三日御老中様御連名之御奉書御到来、今日御登城被遊候処、異国船渡来之節内海御警衛被為蒙、仰、為固大森辺御人数御指出防禦可被遊、依之相模国御備場御用は御免被仰付候段被為蒙、仰旁恐悦之御事<sub>ニ</sub>候、件之趣諸御屋敷御家中衆<sub>江</sub>可被相達候

さて、翌嘉永七年正月ベリ一艦隊は再度姿を現わした。その様子が同年の「御用諸向留」の正月一五日の代官所からの廻状に次のように記されている（四項）。

此度相州青松輪辺<sub>江</sub>異国船老艘相見候<sub>ニ</sub>付、兼而申渡置候急発人足・駄馬、今一応相達候ハ、何時<sub>ニ</sub>而も御上屋敷<sub>江</sub>相揃候様心得可罷居候、（中略）又々唯今追々異国船渡来之様子<sub>ニ</sub>申来候間、何も急度相心得可申候

再度の異国船の渡来に緊張した様子が窺える。また、先に彦根藩は大森辺警備となり相州警備の方は免除された触書が記されていたが、「相州表今以御替<sub>ニ</sub>不相成候<sub>ニ</sub>被、仰付候節三崎<sub>江</sub>可差出候事」として依然変更されず、この時も相州三崎警備として人足五〇九人・馬三六疋を差出した（四項）。

正月一八日には代官所から駄馬・定夫の動員廻状が出された（五項）。

此度異国船渡来<sub>ニ</sub>付兼而急発被、仰付候間、兼而相達置候駄馬・定夫共即刻上町<sub>江</sub>昨日談之通り相心得差出可申候これは、上町の世田谷代官所へ差出させている。

正月二日には猪方村重右衛門から「兵糧御賦方人馬」の差出につき相談したい旨の廻状が出されている（七項）。すなわち、「今般異国船浦賀辺へ渡来致候付、兵糧御賦方人馬可差出旨御役所へ被仰渡候<sub>ニ</sub>付<sub>ニ</sub>而<sub>ハ</sub>は、種々御相談仕度義御座候間（中略）、一通り之御用<sub>ニ</sub>無御座、誠差懸り候義<sub>ニ</sub>付<sub>ニ</sub>吳々も右刻限無間違様御出勤可被成候<sub>ニ</sub>とあり、村役人たちの意識の中にも、危機感が窺える。

しかし、幕府は異国船の到来がすぐにも戦争になるものでないことを人々に知らせ、余計な不安感が募らないように対応している（九項）。

大目付<sub>江</sub>

此度亞墨利加船浦賀表へ渡来致候得共穩之趣有之間、諸向動揺不致火元等別<sub>而</sub>念入候様向々<sub>江</sub>可相達候事

## 寅正月

また、同正月には、異国船渡来のため防衛としての過分の人馬の提出は、かえって村方の人数が少なくなり、その間隙をねらって、悪党が村内に立廻り自治の悪化を招くとして、村方から不相応の人馬の提供を求めないよう次のように申渡している（九項）。

大目付<sub>江</sub>

去夏浦賀表<sub>江</sub>亞墨利加船渡来以後、領分知行<sub>江</sub>過分之人馬触当遣候向も有之趣相聞候、畢竟坊禦專備等之為用意申付候義<sub>ニ</sub>可有之候得共、左候<sub>而</sub>は渡来之節一時<sub>ニ</sub>在方人少<sub>ニ</sub>相成取締不宜、自然悪党共立廻り村々難儀致候様可相成候間、勘弁いたし村方不相応之人馬呼寄候儀致さず、右駄之節は村方取締之儀別<sub>而</sub>嚴重<sub>ニ</sub>可申聞候  
右之趣関八州<sub>ニ</sub>領分・知行有之面々<sub>江</sub>可相触候

## 正月

正月二三日には猪方村重左衛門から「今般異国船渡来御用御賦方御用人足被仰付候義ニ付、種々御相談申上度候間」二四日朝五ツ半時に宇奈根村弥五右衛門方へ出会の廻状が出されている（二〇項）。

幕府がこの時期もつとも恐れたことは、異国船渡来等の対外的危機に乗じて、国内で悪党が横行し治安の悪化を招くことである。

正月に老中から大目付へ出され、大目付から各大名に流された「公議御触書」が同二四日代官所から廻達されている（二二項）。

#### 大目付江

異国船近海へ渡来之節、近国領分・知行有之面々在町取締筋之儀銘々心得も可有之候得共、万一悪党共立廻可申も難計候間、召捕等別而嚴重ニ可被申付置候、若捕押兼候義も有之候ハ、切捨又は相殺共不苦候、右之通御料・私領・寺社領共近国之分不洩様可被相触候

#### 正月

右之通 公儀御触書相廻候間、其旨相心得早々順達留も可返候、以上

#### 正月二四日

#### 御代官所印

正月二六日には、関東取締出役吉田信平次よりの廻状で、「異国船渡来ニ付而は、諸国海防御固メ人数其外御用通行、諸往来繁多宿々飯米多分入用ニ付、先頃中米価も次第ニ引上ケ候哉ニ相聞候間、無謂引上ケ候義難相成旨宿々江申渡候処、最寄村々之者共相場之高下を量り糶売糶買いたし、又は表向諸家用米等之名目ニ而内実買メ、窃ニ多摩川積下シ江戸廻等いたし、其外利向之取計いたし候もの有之哉ニ相聞不埒之至ニ候、右躰之輩於有之は、此節柄之義速ニ召捕相糺候条、心得違不致様小前末々迄も不洩様能々可申聞候」とある（二四項）。異国船渡来警備に関し、通行往来が激しく宿々の



飯米需用が高まるのにつけ込んで米価を引上げて利益を貪る者の取締りを命じている。異国船渡来が国内に与える影響は治安の乱れと米価高騰であったことを知ることができる。

さらに同正月には、組合村の嚴重警備の申合議定がなされている（二六項）。それによると、

①「人氣不穩慮<sup>ニ</sup>乗し惡党共立廻り候義も難計<sup>ニ</sup>付」として、組中たえず廻村し、「無宿・無頼」のものを召捕ることに。

②「異国船到来<sup>ニ</sup>付<sup>而</sup>は、百姓共諸御用所へ相詰出払、老親妻子相殘候を見込惡党共乱妨難計」として、村々で申合せて番屋を立て相図し合つて警備を嚴重にする。万一党を結び、長脇差等で狼藉に及ぶ場合は防ぎがたいので、「天明度之振合を以竹鎗等用意追払」うこと。

③村々で竹鎗を用意し、村役人ならび番屋で保管し、普段は百姓へ渡さないこと。

④村々の相図には太鼓を使用し、太鼓が打たれたときは早速駆付、助力することとし、太鼓は名主方か番屋に置くこと。

このような緊迫したなかで、二月二一日・二二日には浦賀表へ出勤した村役人の費用や村々から出した人馬の勘定のための集会の廻状が出されている（二二項・二三項）。

さて、三月九日には、井伊家「御勤番半介殿方御渡<sup>ニ</sup>相成候」という「御達書写」が記載されている（二八項）。これは、「殿様日夜不御容易御心痛之事<sup>ニ</sup>候間、御百姓共一同數百年來御領内<sup>ニ</sup>安居いたし 御国恩を蒙り、（中略）御百姓堅固大切<sup>ニ</sup>可相勤候」とあり、時恰かも領主井伊直弼が幕閣の中心となり、重大な時局の責任者として、「日夜心痛」しているので、井伊家領内の百姓共は、村方の出入等いっさい止め、百姓として農業に精励するようにとの達書である。

三月二六日には、井伊家が「御備場御用」が御免となり、「内海御警衛」を命ぜられたとの達書がみえる（三〇四項）。三月二八日には、江戸城にて「此度異国船渡来ニ付御備場其外御警衛御行届被遊御満足ニ付、思召御人数も数日骨折大義ニ思召候段」という將軍からの「上意」を受け、このことを御屋敷御家中衆へ通達している（三五五項）。

四月五日には、世田谷領大惣代より異国船渡来についての特別警備を解除する廻状が出されている（三七七項）。

異国船渡来世上不穩御取締方被仰付、夫々仕法相立組合隣郷入会村々等申合致候所、最早穩ニ相成候様子ニ付、一般引払諸事平常之通操戻可然存此段相談申候、勿論御改革御趣意不相弛小前心得違無之様御同前可申聞候

異国船渡来の特別警備体制は解除するが、「勿論御改革御趣意不相弛」とあるところが注目される。文政改革以来の関東取締体制は依然存在していることを確認しているのである。

四月九日には用賀村麻二郎から「先達而相州御急免御用人馬并御出馬分共御領内出高并勤高取調」諸帳面持参の廻状が出されている（三九項）。

四月二七日には鎌田村名主源右衛門から、「浦賀行路用勘定先達而大蔵而致候所、不行届ニ相成居（中略）、今一応参会仕不残委細勘定仕度」として二九日四ツ時源右衛門宅への召集を呼びかけている（四〇四項）。

四月二五日には井伊家老庵原助右衛門・岡本半助から御元方御勘定奉行衆・佐野奉行衆・御賄方衆・御納戸役衆へ宛てた文書が記載されている（四八項）。

それによると、「当春中異国船渡来御用ニ付御呼寄ニ相成候所、日数之義相懸り難渋有之趣ニ而雜用御救立として被下置候」として、「世田谷郷夫并駄馬口付共」として七八七人に対して、一人につき五〇〇文ずつが、また「右肝煎役人」として二〇人に対して、一人につき一〇〇文ずつがそれぞれ支給された。これは、井伊直弼が嘉永六年（一八五三）ペリー来航に際して藩兵二〇〇〇人を動員して警備にあたった際、世田谷領二〇か村から提供させられた郷夫・

第2表 嘉永5年～安政7年 上野毛村「御用留」からみた夫役負担の動向

区分	領主井伊家関係										幕府関係				合計												
	供人足		豪徳寺法事・参詣等				江戸屋敷		その他		鷹場		用水		回		人足		馬								
内容	量	回数	人数	全体	回数	人数	全体	馬数	馬全体	回数	人数	全体	馬数	回数	人数	全体	馬数	回数	人数	上毛	全体	下毛	全体				
嘉永5年	10	60	1036	13	29	135	8	29	6	18	158			2	15	250		6	11	94		37	133	1673	8	29	
嘉永6年	9	59	1245	12	31	82	10	10	17	41	460	9	23	5	15	364		3	6	144	2	5	48	157	2295	19	33
嘉永7年	6	53	885						7	6	128	6	15	2	8	807		1	2			16	69	1820	6	15	
安政2年	5	16	300	1	1		1		8	7	238	1	9	3	24	750		4	25	517		21	73	1805	2	9	
安政3年	7	25	899	2	5		1	3	3	4	113			2	3		1					14	37	1012	2	3	
安政4年	12	31	718	3	4	150			4	6	195	2					2	4	4	118	1	1	22	46	1181	2	
安政5年				17	44	439	6		7	17	237							1	4	80			25	65	756	6	
安政6年	3	7	280	6	14	450	4		7	23	625	3	9								1	1	17	45	1355	7	9
安政7年				19	44	455	8	20	15	41	202	5	9				2	3	60			36	88	717	13	29	
合計	52	251	5363	73	172	1711	38	62	74	163	2356	26	65	14	65	2171	1	19	55	1013	4	7	236	713	12614	65	127
1年平均	5.3	27.8	595.8	8.1	19.1	190.1	4.2	6.8	8.2	18.1	261.7	2.8	7.2	1.5	7.2	241.2	0.1	2.1	6.1	112.5	0.4	0.7	26.2	79.2	1401	7.2	14.1

(注) 人数の全体・馬全体というのは彦根藩世田谷領20か村分全体という意味であるが、上記の数字は全体が記載された分のみであり、全体数の記載のないものも少ない。それ故、実態としての全体数は、この数字を大幅に上まわるものである。

駄馬に対して支払われたものであった。

六月二七日には、代官所から「当春異国船渡来之節罷出候もの<sup>正</sup>被下之品配分致候間、明二七日上町<sup>正</sup>可罷出候」とある（五八項）。

このとき「御急発御出馬御褒美頂戴」として、人足二四人で錢一二貫文で此金老兩三分六八〇文、外金老分を名主が頂戴したとのことである。このようにして、異国船到来一件は終息するのである。

なお、本書の対象とした時期の夫役負担の動向を整理すると第2表のとおりである。

## （2）開港と社会経済變動

嘉永七年の「御用諸向留」の十一月には、同年（一八五四）三月日米和親条約を結んだ幕府は、これまで「通商御免之国柄」のオランダに対しても下田・箱館の両湊で薪水・食糧その他船中欠乏の品を供給し、破船修覆等アメリカ同様に便宜を計うことの触書を出している（二〇六項）。

安政二年の「御用向留記」の三月一日には代官所より海岸防衛のため諸国寺院の梵鐘をもって大砲・小銃に鑄換の命令が出され、武備充実のため銅鉄は勿論錫鉛硝石等いずれも必需品であり、今後仏像等は木製又は陶器で製造するようにという「公儀御触書」を廻達している（一七項）。

九月には諸国寺院の梵鐘のうち、「本寺<sup>并</sup>古来之名器、当節時之鐘<sup>ニ</sup>相用候分相除」その他は残らず大砲・小銃に鑄換するので幕府へ供出せよとの触書が出されている（七四項）。その理由として、「近來諸夷引続入津致武備專要之御時節、大砲・小銃とも急務之品<sup>ニ</sup>而御国備御堅固<sup>ニ</sup>被成置度<sup>一</sup>」とある。同じことが太平洋戦争下でも実施されたことは、まだ記憶に新しいところである。

安政三年の「御用状留記」の二月一八日には上野毛村触次七左衛門・寛東村孫七の連名で寺院梵鐘の調査は「御領分は追井伊様御調にも可相成候趣は御座候得共、一領内之義に付御問合申上候、私共取調候義は無御座候」と慎重な姿勢を示している（六項）。

同日、下北沢村御用先より触次沖右衛門から、「梵鐘取調帳今日御役所へ差出候処、世田谷領中村々不残入会之分共委數認め可差出旨被仰付候間」として再調査を命ぜられている（七項）。かなり徹底した調査が要求されたことが判明する。

「諸事御用向留記六」の安政五年四月には「亜墨利加使節<sup>江</sup>用向有之近々下田湊<sup>江</sup>同国軍艦渡来可致由」の触書が出され、「右に付別段固人数等差出し候は不及候」と添書されている（三六項）。

しかし、「午四月亜墨利加軍艦相州浦賀<sup>江</sup>武州本牧迄之内<sup>江</sup>渡来碇泊致し候義に付、御領分村々惣人数取調奉書上候様被仰渡候に付」として、上野毛村分と世田谷領二〇か村分の惣人数等が第3表のように書きあげられている（三九項）。

これは、日米通商条約締結をめぐり、緊迫した情勢を反映したものである。

安政五年の「御用状留記」の六月一八日には、一三日に下田湊へアメリカの蒸気船二艘が入津し、その内の一艘は一七日に小柴沖へ入津し、ロシア船一艘も一昨一六日下田へ渡来し、またイギリス・フランス船も近々に江戸近海へ渡来の予定であるので、「為心得相達し候」とある（五六項）。アメリカ・ロシア・イギリス・フランス等が連携して日本に通商条約を迫り、圧力をかけている様子が判明する。

安政六年の「御用状留記」の五月には五か国との通商条約が締結され、貿易が開始されることを次のように触れている（三三項）。

第3表 安政5年4月世田谷領分夫役人数一覧

村	人数 (15~60才)	内 訳		
		病身之者	柔弱之者	屈強之者
上野毛村	35人	6人 (17.1%)	14人 (40.0%)	15人 (42.9%)
御領分20ヵ村	1646人	30.6人 (18.5%)	568人 (34.5%)	772人 (47.7%)

大目付<sup>五</sup>

魯西亜・仏蘭西・英吉利・阿蘭陀・阿墨利加五ヶ国交易御指免<sup>ニ</sup>相成候間、当未六月<sup>五</sup>神奈川・長崎・箱館三湊<sup>ニ</sup>おゐて商人共勝手次第<sup>ニ</sup>可遂商売候、右之者共舶来之品々売捌候ものは勿論、居留之外国人共見世売之品処人買取候義も是又勝手たるへく候

右之趣御料・私領・寺社領共不洩様可触知もの也、右之趣可被相触候

五月

それと同時に、外国に売ってはならない品として、官服の類、御法度書、雲上明鑑、武鑑・官位高等記の書類、兵学者、板本になっていない写本の類、城郭・陳列の図、甲冑・劔とその附属の小道具、銅等を列挙し、もし売渡した場合は当人は勿論五人組まで罪科に処せられるとしている(二三項)。

また同五年には外国交易についての金銀通用の触書が出され(三四項)、外国の金銀と国内通用の金銀比価を同等にするための「吹直し」(铸造)が実施されている(三五項)。

六月には神奈川開港につき、外国人居留地として、六郷川筋を境に一〇里四方の歩行自由を認める触書が出されている(三七項)。

同六月には「異国船之武器類開湊場<sup>五</sup>見本為差出置候間、万石以上・以下、諸家陪臣<sup>ニ</sup>至迄買受候義不苦候、望之面々は勝手次第最寄開湊場運上役所<sup>五</sup>罷越承合候様可致候」として外国船の武器類の自由販売が実施されていることが注目される(四五項)。

同六月には「外国交易御取開有之、外国人開湊場<sup>五</sup>船を寄、其最寄居留とも御指許相成

候ニ付而ハ、其外之ものハ勿論海上又ハ途中何れ之場所ニ而も外国人<sup>江</sup>出会候節書状届方等頼れ、或ハ品物など賊候とも堅断およふへし」とあり居留地以外での取引きを禁止するととも天保一三年（一八四二）に「浦々建札」の薪水給与令の取り払いを命じてい（四五項）。

七月二日には「昨十八日ハ魯西亞国軍艦追々入津都合七艘品川沖<sup>江</sup>碇泊いたし候間、諸事は迄之通り相心得候様面々<sup>江</sup>可被達候事」とあり（五一項）、「外国人歩行之節途中不作法無之様各国長官之もの<sup>江</sup>申達し置候義ニハ候得共、御国法弁も無之ものニ付自然途中行合之事も有之候ハ、可成丈大穩便ニ取扱、其段外国奉行<sup>江</sup>可被相届候、尤右之趣家来共<sup>江</sup>而可被申付置候」として外国人への対応について触れている（五一項）。

七月二四日の「公儀御触書写」には、「外国人市中歩行之節礮抛候もの有之哉ニ相聞如何之事ニ候哉」として外国人への乱暴を取締っている（五四項）。しかし外国人殺傷事件が後をたたなかつた。

八月七日の関東取締出役喜多村解輔の廻状には次のように記されている（五五項）。

去月廿七日暮六ツ半時頃、神奈川横浜ニおゐて士鉢之もの異人<sup>江</sup>為疵負逃去り未以行衛不相分、右之年齡凡貳拾七八歳位<sup>ニ</sup>而羽織着用無之立附様之袴着用いたし候士、同月廿八日以来通行又ハ止宿等有無、其村々渡舟場并旅籠屋・水茶屋等得と取調、最寄四五ヶ村惣代<sup>ニ</sup>而も宣敷候条否早々可申出、（以下略）

外国人に負傷させ逃亡している侍鉢のものの手配書である。

八月にも外国人へ礮打つものの取締令が出されている（五七項）。

同月ロシアとの条約締結の触書やフランス船一艘が品川沖に入津した知らせが記録されている（五八項）。

八月一六日には、先の外国人殺傷につき再度具体的な情報が「公儀御触書写」として触れられている（五九項）。

当七月廿七日暮六ツ時頃、神奈川横浜町ニおゐて、何者共不知魯西亞人を殺害およひ逃去り行衛不相分、其節魯西

重人水夫所持フリツキ箱入之尽紛失之所、其後神奈川太田町堤外海面ニ右箱銀錢拾六枚・金錢一枚入捨有之候、且刃傷および候場所ニ左之品々捨有之候

一麻風返し割羽織袴

一刀之折れ七寸程

一麻裏草履片足

右之通りニ候間末々ニ至迄遂穿鑿、あやしきもの見および聞および候ハ、最寄奉行所ニ訴出へき者也

右之通り御料・私領・寺領共不洩様早々可被相触候

八月二四日には、京都出生の土鉢のものが「異人を殺害致候ものニハ無之哉と被存候間」としての人相書が関東取締出役喜多村解輔より廻達され、それを世田谷村寄場大小惣代役人から各村へ順達している（六一項）。

安政七年の「御用状留記」には、前年六年一月二八日の触書が記載されており、そこには「外国銀錢目方七匁以上之分、壹分銀三分通用之積り於銀座極印打渡し候間、無滞通用可致旨、尤銀錢所持いたし居候ものは銀座ニ差出し極印を受可申候」とあり、外国とわが国の銀錢の通用比価に触れている（四項）。

翌一二月二九日には、道中筋において「御朱印・印章持参之ものニ行逢候節都而相互ニ下馬・下坐不致咎ニ取極候事」の触書が出された（四項）。これは「下坐」の有無をめぐって「万一言語之不通ニ行違相生し可申義難計ニ付」とある。

同日には、また「往来之輩行逢之節相互ニ護り合不作法無之様可致ハ勿論之事ニ候得共、近来条約済国々之もの御府内其外ニ居留いたし、右之内ニは長官又ハ士分以上之者も有之候間、右は行逢候節も同様相心得、輕キもの共ニ至迄我さつ之義無之様可致もの也」と触れ（四項）、外国人に対する態度に慎重さを求めている。これらの触書はすべて老中から大目付へ出され、大目付から各大名へ布達されたものであり、「公儀御触書写」とよばれるものである。



正月二日には鷹場内で外国人が発炮した場合はなるべくだけ「穩ニ相制、若不聞入候ハ、其者名前・国名・宿寺等承り其段早々駒場御役宅<sup>五</sup>可申出候、若又名前・宿寺等も委數相分り兼候ハ、人体様子委細可申出候」という触書が鷹場役人から鷹場組合村触次寛東村孫七宛に出されている（二〇項）。これらからみると、外国人も必ずしも居留地内にいるだけではなく、相当遠出などもしていたことがわかる。それ故、幕府は外国人と日本人との間で種々問題が発生することを恐れていたのである。

さて、外国との交易開始により幕府が頭を痛めた問題は、外国人に対する殺傷事件等の治安問題と通貨の流通問題であった。外国と日本の金銀比価の相違から良質の日本の金銀が大量に流出するという問題があり、外国と等価交換するために質の悪い金銀を鑄造しなければならなかった。このことが幕末の物価高騰<sup>二</sup>インフレーションに拍車をかけたことはいうまでもない。

正月二〇日には、「公儀御触書<sup>六</sup>」として次の触書が廻達されている（二一項）。

外国交易ニ付貨幣之釣合不宜候間、近日改鑄被 仰出候迄左之通り通用可致候、尤引替之義ハ追<sup>而</sup>可及沙汰候

一 保字小判老兩 金三兩一分貳朱

一同老歩判 金三分壹朱

一 正字小判老兩 金二兩壹分三朱

一同老歩判 金貳分三朱

右之通り相心得来ル二月朔日<sup>七</sup>より外国金銀取交兩替無滞通用可致候

これは、保字小判・正字小判の通用価値を定めたもので、保字小判一兩は三兩一分二朱として通用するとしたものである。三倍以上の高騰となっているのである。

(3) 永上金・調達金の上納

嘉永五年「御用書筆記」の七月一〇日には野良田村与一右衛門からの廻文として、「此度 御屋敷様へ御上納金被仰付候」として、村々にて上納人の有無について相談したので参会を依頼している(五七項)。

八月一九日の代官所からの廻状によると、「此度永上金・御調達金願出候もの一同当人印形持参可出候」とある(六四項)。

一〇月五日には代官所より、上野毛村七左衛門・同要二郎の兩人が「此度御調達并永上金願出候もの共印形入用候間、早々持参調印可致候」とあり、この廻状は一〇か村人数二八人に出されたものであった(八八項)。

一二月九日には、代官所より「差上金御調達金致もの<sup>五</sup>為御褒美被下置候御品御出来<sup>ニ</sup>付、明日四ツ時不遅様佐

第4表 永上金調達金差出者一覧

村 名	名 前	金 額
世田谷村	政右衛門	100両
"	久右衛門	100両
大蔵村	石居藤八	100両
上野毛村	重右衛門	100両
用賀村	鈴木寅松	150両
"	鈴木六之助	150両
"	飯田武七	150両
"	飯田与四郎	100両
弦巻村	徳二郎	100両
"	幸 助	100両
合 計		1150両

(注) 文書では「此金千百両也」とあるが、計算では1150両である。

野奉行衆御長屋<sup>五</sup>無相違可罷出候」と触れられている(二〇四項)。

嘉永六年「御用状留記」の八月一七日には用賀村飯田麻次郎・野良田村粕谷与一右衛門よりの廻状で「永上金差上候もの共印形持参取集」のための上町への出勤の廻状が出されている(九四項)。

八月二四日には永上金御調達金出願の者として、第4表のような村名・名前・金額が書きあげられている(九六項)。

一〇月五日には代官所から上野毛村重右衛門に対し、「右は此度永上金并御調達金いたし候もの共<sup>五</sup>明六日被下之御品被下置候間、永上・御調達之者共不残五ツ半時迄ニ御中屋敷佐野奉行衆御

長屋<sup>江</sup>可罷出候」という廻達が出されている（二二九項）。

一月六日には井伊家江戸屋敷詰役人多賀谷左内・山中宗十郎から世田谷代官衆宛で「急御用」として、「今日被下之御綿御指紙間違人別<sup>ニ</sup>可被下置儀<sup>ニ</sup>は無之間、右綿取散さる様不殘代官所<sup>江</sup>御預置可有之候」として、代官所へ回収している（一三〇項）。

年の暮も押しつまつた一二月二九日には用賀村鈴木六之助より「口上」として、「御領主様も調達金御利足被下置拙者<sup>江</sup>割渡可申様被仰付候間、今日より正月三日頃迄御勝手次第印形御持参<sup>ニ</sup>而私宅<sup>江</sup>御出御受取可被成候」とあり（四六項）、また「尤も永上納之ものも金五拾兩納候御利足も三分式朱預置候」とあり、調達金・永上金ともに利息がつけられ、領主側の借入金であることがわかる。

嘉永七年の「御用諸向留」の正月一二日には代官所より「去ル九月中永上金致居候もの共より都合金五拾兩御調達金御差上候一条<sup>ニ</sup>付、少々分兼候儀有之間、銘々名前之上<sup>江</sup>出金高相記早々順達可致候、尤先來永上金之輩能々吟味可申出事」とあり、第5表のような出金高と名前が書きあげられている（二項）。

二月には用賀村鈴木六之助より用賀村飯田武七ほか八名の永上金・調達金差出者に宛て、「然は去丑年中永上金被成候御証文未タ御渡し無之候處、右御扶持方之御証書來十六日頂戴被仰付候付、朝五ツ時村役人差添大場様へ可罷出旨御達御座候」という触達しが出されている（一二三項）。当時用賀村鈴木六之助が最高額の永上金・調達金の差出者であり、「右之趣拙者も相触候様被仰付候」とこのような世話役も担当していたのである。

「諸事御用向留記六」の安政三年四月には京都御普請手伝と地震物入につき、彦根・佐野・世田谷の三領から調達金を提供させていたことが次のように記載されている（一一項）。

一 安政三<sup>丙辰</sup>年三月中京都御普請御手伝<sup>并</sup>地震御物入<sup>ニ</sup>付三御領分彦根・佐野・世田谷共御調達金被仰付候分

第5表 永上金上納者一覧

永上金高	利息分	村名 名前
150両	1両3分2朱	用賀村 虎松
200両	2両2分	用賀村 与四郎
400両	5両	用賀村 武七
450両	5両2分2朱	用賀村 六之助
ノ1200両	15両	
500両	〔嘉永6年9月中上納分〕	野良田村
200両	500両	用賀村
300両	200両	弦巻村
200両	200両	世田谷村
100両		下野毛村
400両	100両	上野毛村
300両		瀬田村
100両		岡本村
300両		猪方村
200両	100両	大蔵村
100両		宇奈根村
200両		岩戸村
12口ノ3000両	ノ1100両	

惣ノ 5300両 此俵 477俵

一合金千三百七拾五両也 御領分貳拾ヶ村

之内五ヶ村納高

内

千両也 用賀村鈴木六之助

百両也 同 飯田武助

百両也 同 与四郎

百両也 上野毛村田中七左衛門

貳拾五両也 岡本村虎次郎・源七・祐次

郎

貳拾五両也 大蔵村石居藤八

貳拾五両也 岩戸村須田源蔵

合

右之通四月廿日世田谷御代官所へ一同持

参相納、御同所御添書ヲ以用賀村年寄六

之助・岩戸村名主源蔵兩人同道御上屋敷

御納戸御役所ニ持送り人夫用賀村六之助

下男ニ為荷罷越相納候也

これによると、五か村九人で合計一千三七

五両を調達金として納入している。なかでも用賀村鈴木六之助は一人で千両という大金を提供していることが注目される。この鈴木六之助は安政六年の横浜開港により貿易が開始されると、横浜に店を出し、いわゆる「売込商」として活躍するのであった。<sup>(4)</sup>

安政三年の「御用状留書」の五月二五日には代官所より上野毛村田中七左衛門に対し、「右は御調達金之義ニ付申渡候義有之間明日上町へ可罷出」という出頭命令が出されている(三六項)。

同年六月九日には竹中喜八より世田谷代官衆に宛て、調達金・永上金上納者に対し「御褒美御品」の下付が伝達されている(四一項)。

それによると、調達金・永上金の提供者は左記のとおりである。

用賀村 鈴木六之助・飯田武七・飯田与四郎

上野毛村 田中七左衛門・同重右衛門

岩戸村 須田源蔵

大蔵村 石居藤八

岡本村 虎二郎・源七・祐二郎

世田谷村 宗八

六か村二一名が記載されている。

この時、「御褒美御品」としてどのようなものが与えられたかは未詳である。

「諸事御用向留記六」の安政三年二月三日付で代官所より上納金を命ぜられている(二五項)。それによると、井伊直弼が「一昨寅年より京都御守護猶又禁裏炎上ニ付御普請御手伝等被蒙仰、御守護之義ニ附而は年々御失費不少、  
(安政元年)

殊不容易御普請御手伝等之儀旁引統<sup>而</sup>之 御公務莫太之御用途ニ付、当御領分も今般御用金高老石ニ付三朱之割合ヲ以、当辰も戊迄七ヶ年賦ニ上納可致旨被 仰付候間、七ヶ年之間無相違十一月中大場隼之助宅<sup>ニ</sup>相納可申候、尤当年之義は来十七日納手形相添納可申、無滞早々順達留<sup>も</sup>可返候」とある。すなわち、殿様が京都守護を命ぜられ、その上、禁裏が炎上したので、その再建等で莫大な費用を必要とするので、井伊家領分内から高一石につき金三朱の割合で安政三年から七年間にわた上納を申付けるといふものである。

世田谷領二〇か村のその計算方式が提示されているが、ここでは繁雜のため省略するが、上野毛村は一〇貫三二五文を七か年賦とし、一カ年永一貫四七五文を上納することとなった。

また永上人たちも、これまで扶持米を支給されていたが、その扶持米高に應じて、上納を命ぜられた(一五項)。

安政四年の「御用状留書」の四月一三日には、「式人扶持之もの共百表ニ付上ヶ米四表、尤日数三百六拾日之割」として一斗四升四合、この代永が一五三文一分九厘で金二朱と鏝一八六文を、上野毛村要二郎・重右衛門が納入している(二七項)。

安政五年の「御用状留記」の二月一七日にも永上金御扶持方にも二人扶持・六人扶持についての上納高が記され、前者では米一斗四升四合此金三朱鏝一一三文となり、後者では米六斗四升八合此金三分二朱鏝二九〇文となり、二月二〇日までに入納するよう代官所から命ぜられている(七項)。

安政六年の「御用留記」の二月二〇日にも永上金御扶持方の上納高が記されている(七項)。  
安政七年の「御用状留記」の正月二六日にも同様の記載がある(九項)。

三月一三日には代官所より「献立并御調達金共出来次第早々上町江相納可申候、可成丈取急候様取計可申」とあり「追<sup>而</sup>献金・献米名前書上ヶ帳写差出可申候」とある(三二項)。

第6表 安政7年閏3月 調達金提供者への褒美

村名	名前	褒美品
村賀村	六之助	江州綿2把
村賀村	武七	江州綿2把
村賀村	与四郎	江州綿2把
村賀村	飯田 麻次郎	江州綿2把・箱入御盃1
村賀村	飯田 木中	江州綿2把
毛村	寅松	江州綿2把
野方村	左太郎	江州綿2把・左野綿1把
猪弦村	善三郎	江州綿2把
弦巻村	実相院	佐野綿1把
弦巻村	浄光寺	佐野綿1把
弦巻村	常在寺	佐野綿1把

上野毛村では、名主左太郎が代官所に対し「右は今般御国恩為冥加御献米金御上納仕度奉願上候」として、惣百姓中として金一兩二分二朱、田中重右衛門が金三兩、田中要次郎が金二兩、田中左太郎が米一〇俵（但兩四斗位）で合計六兩二分二朱、このほか田中左太郎が「御調達、金五拾兩也」を上納した（三四項）。これに対し、井伊家老脇五右衛門から「御時節相弁米金献上仕度段願出奇特之事ニ候」として「御褒美」が与えられている（五六項）。簡単に表示すると第6表のとおりである。

このほかにも野良田村・小山村・下野毛村・上野毛村・瀬田村・岡本村・鎌田村の七か村の百姓等四〇名余に酒合計一石九斗四升が支給されている（五六項）。

万延元年閏三月には「差上申献金御酒料頂戴之事」として、金子一兩につき褒美酒料一貫二〇〇文ずつの割合で上野毛村の良蔵・次右衛門・忠右衛門・十五郎・十右衛門・要次郎等六名に金子が与えられている（六九項）。

四月二日には、代官所より用賀村飯田麻次郎、上野毛村田中左太郎に対し、「右ハ先日献金ニ付、御褒美御渡しニ相成候間、明日御納戸方江可罷出候、尤惣代ニ罷出候義ニ付人足連可申、右相達し申候」とある（七八項）。

永上金・調達金上納者に対し、御褒美として江州綿・佐野綿や酒等を支給していたことが判明するのである。

(4)「悪党」横行と関東取締出役

幕末になるにしたがい無宿人の行動も激化の様相をおびてくる。

嘉永五年「御用書筆記」の十二月一日夜には大惣代有源次から次のような廻状が出ている(二〇〇項)。

御霊屋料等々力村

無宿

熊次郎

右のものの抜刀を以押込、昨日途中ニ見掛差押候もの数ヶ所疵受当人逃去、兎角最寄ニかゝまり居候間、兼御取締役太田源助様・山口頭之進様御沙汰御座候間、明日手配山狩いたし候、尤其筋々道案内之もの差出候間、其節村々ニ手強人足早々御差出無差支様御取計可被成候

無宿熊次郎の等々力村は世田谷領で深沢村名主大惣代有源次の隣村である。抜刀をもって押込み、警備人らに疵を負せて逃亡するなど、関東取締出役の命令により、「山狩」を実施するので組合村では「手強人足」の提供を命ぜられたのであった。しかし、一二月二日の大惣代有源次の廻状によると、無宿熊次郎は浅草茅町辺で「町方御召捕」になったということである(二〇一項)。

同日関東御取締出役太田源助から寄場惣代中に宛て、等々力村無宿熊蔵につき、「右之もの儀麻布本村町ニおゐて手配之節、町方手之ものニ為疵負逃去候所、昨朔日浅草辺ニおゐて御用弁ニ相成候間、最早穿鑿不及候間、組合村々并道案内之ものニ通達可被致候、次上」とある(二〇三項)。十二月五日には世田谷村寄場役人から、「右は熊蔵儀兎角組合最寄立廻候ニ付取押方被 仰付、則手配之義兼御達申上置候処、前文之通御達し有之間組合御村々とも御承知



可被成候」とある（一〇三項）。世田谷村組合に属する等々力村無宿熊蔵であるため、世田谷村組合では熊蔵の立廻り先として嚴重な警備体制をとっていたのである。

一月二日には甲州絹商人郡内領上暮地村名主左兵衛が甲州道中烏山村小嶋屋林蔵方で休息し、それより代田橋辺で道連れになった者に、品数一四品分、メ九四疋の絹を奪取られてしまったという。世田谷領組合寄場大小惣代から「村々質屋・古着屋とも得と吟味いたし、似寄之品有之候ハ、早々可申出旨被 仰付候間、村々質屋・古着屋精々御取調有無共書付ニ而御村役人老判相添、来廿三日迄無相違深沢村大惣代方へ御持参可被成候」という廻状が出されている（一〇八項）。十二月三日には上野毛村名主見習左太郎は「右取調、当村之義は質屋・古着屋渡世之もの老人も無御座候間此段申上候、以上」と寄場大惣代役人へ回答している（一〇八項）。

嘉永六年「御用状留記」の正月に関東御取締出役よりの廻状として、子ども達が往来で金錢をねたり、飴菓子等の買喰、さらには賭事に携るものがあるとして嚴重な禁止令を出している（二項）。

近來正月之内村々ニおゐて小兒共寄集、申合往還泥縄引張往来之ものへ致迷惑させ錢ねたり取、飴菓杯買喰いたし候を能事ニ心得追々増長、中ニは右錢を元手に致賭事携候族も有之哉ニ相聞、物貰同様所業以之外成儀候、右は畢竟親々共養育方不宜ち起候事ニ付、重而右牀之義致間敷と小兒共正急度申聞、於村役人ニも精々差止可申、此上廻村先ニ而右様之義及見聞候へは無用捨召捕夫々嚴重之取計致候条、心得違之もの無之様組合村々小前末々迄無洩落入念可申聞候

丑正月

関東御取締出役

右之通り御触ニ付相達候、此状受印順達留ち相返可被成候、以上

寄場

四月一日には関東取締出役渡辺園十郎の廻状として、武州長尾村内山内で「往来之女<sup>五</sup>深手為負、書面之着用之衣類剥取逃去候もの有之、右品々は何も血付有之候付道案内之ものと得と申含、木綿もの又ハ質渡世之もの等密々相糺、右<sup>二</sup>似寄候品捌候もの有之儀ハ召捕早々可申越候」とあり（四五項）、狂暴な追剥事件が発生していることがわかる。

嘉永七年「御用諸向留」の八月九日には、関東取締出役広瀬鐘平・同関畝四郎の連名で日光道中草加宿旅籠屋で羽州寒河江陣屋から護送中の幕領の年貢金が盗取られた事件が発生し、その犯人の手配方が示達されている（七七項）。

それによると盗賊二名が立入り「右御年貢金之内疋分銀・式朱金取交五百八拾五兩疋分、錢五百四拾疋文盗取逃去候」とある。護送中の年貢金を略奪するというのは大胆な行為であり、内部事情を知るものと推定される。

安政二年「御用向留記」の三月二日には、関東取締出役より世田谷領組合村一村ごとの「村明細帳」の提出が命ぜられていた（一一項）。

その内容は①質屋稼業者の名前・年齢・持高・質屋開始時期、②村高・家数・人口（男・女別）・牛馬数、③寺院名とその朱印高・除地高、④山方か川附か・渡舟場の書上げ、⑤男女農間の稼ぎ、⑥産物書上げ、江戸へ出荷の品名、⑦市立日等である。これは関東取締出役の村方把握の資料として提出させたものであろう。

五月二日には関東取締出役百瀬・安原・関の三人の連名で、上州木崎宿で取締出役に「手向いたし悪党共之内<sup>二</sup>而、此節専ら山狩手配最中差当行衛不相分」とした無宿三名の人相書が廻達されている（三四項）。すなわち、上州佐位郡下植木村無宿善次郎、同州同郡綱取村無宿茂吉事茂助、同州新田郡十日尾村無宿源太郎らである。

安政五年「御用状留記」の三月二七日の関東取締出役広瀬鐘平からの廻状には「当月十七日夜八王子横山宿無宿彦

兵衛を右宿同畑中<sub>ニ</sub>引出及切害逃去り、何れも風呂敷包を背負商人躰<sub>ニ</sub>仕成立廻り候哉<sub>ニ</sub>相聞候間、其寄場組合村々<sub>江</sub>ハ勿論道案内之もの江も得と申談、食物商ひ候もの迄も夫々申含置捕押方精々可被致候」とあり、無宿四名の人相書を示している。すなわち、武州多摩郡柚木領大塚村無宿者かん事勘五郎、右勘五郎子分之由同州同郡同領寺沢村百姓常右衛門倅かざ長事長八当時改名嘉左衛門、勘五郎兄弟分之由上州出生無宿喜代、三州無宿名前不分等である。これらの無宿は子分・兄弟分であり、数人で組んで横行し、長脇差等を携帯していたことがわかる。

以上の記事により、無宿の横行と治安体制の動揺が顕著になってきているといえる。

### (三) 世田谷領支配の動向

#### (1) 領主井伊直弼に関する情報

嘉永三年（一八五〇）二月五日の大火で井伊家上屋敷は類焼し、嘉永五年（一八五二）三月八日に再建引越しとなった。嘉永五年の「御用書筆記」の三月四日には引越のための人足が世田谷領から一〇六人、そのうち五〇人が棒もつこ持参で、「来八日御本奥御上屋敷へ引越御用<sub>ニ</sub>付七日夕揃東御台へ可出候」とある（二七項）。

同五年八月一九日には井伊家の婚礼が、各村々にも触れられている（六七項）。

#### 御目付<sub>江</sub>

今日吉辰<sub>ニ</sub>付 御縁女様御引取御婚礼御祝儀首尾能被為相整奉恐悦御事候  
件之趣諸御屋敷御家中衆<sub>江</sub>可被相達候、尤 御縁女様御儀御前様と奉称候間是又相達し可被申候

八月十九日

(中略)

件之通り御触相廻り候間村々共得其意相触可申候、早々相廻し留りより可返候、以上

子八月廿四日

御代官所印

直弼は弘化三年(一八四二)一〇月に丹波亀山藩主松平信篤の妹昌子と結婚しているので、この婚礼は井伊家の他の者であろう。

安政五年の「御用状留記」の三月二一日には「弥千代様御義松平讃岐守様<sup>五</sup>御引取、即日宮内大輔様<sup>五</sup>御婚姻被為相整度段御願被遊候処、御願之通被為蒙仰恐悦之御事<sup>ニ</sup>候」とあり(二二項)、四月二日には「今二日松平宮内大輔様と弥千代様へ御結納御祝義被懸候処、万端無御滞被為済恐悦之御事候、件之趣諸御屋敷御家中衆へ可被相達候」とある(二三項)。

四月一四日の代官所の触書には、「来十日 弥千代様御道具初立被遣候間、今十四日夕東御台所へ相揃可申、尤御婚礼御道具持夫<sup>ニ</sup>付左之通り」として、「一人々髪月代致候事、一細帯不相成事、一老人・子供不相成候事、随分人柄宜敷もの相撰可申」とし、「殿様御覧も御座候御様子<sup>ニ</sup>付」と述べている(二六項)。

安政五年四月二三日には井伊直弼が大老職に任命されたことが次のように触れられている(三二項)。

御目付<sup>五</sup>

昨廿二日御老中様御連名之御奉書御到来、今廿三日御登城被遊候処、於御前御懇之上意を以御大老職被為蒙仰、誠に御重御役儀被為蒙仰候上慮之御次第御冥加<sup>ニ</sup>被為相叶候御儀恐悦至極之御事候、件之趣諸御屋敷衆・佐野・世田谷御領分中<sup>五</sup>相達し可被申候

四月廿三日

これについて、「今度 御大老職被為蒙 仰御威光之御儀、右<sub>ニ</sub>付御家中衆末々百姓町人<sub>ニ</sub>至迄 御上之御威光を以他所向<sub>ニ</sub>対し<sub>ノ</sub>のさばり不礼法外之筋<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>之候<sub>ニ</sub>而ハ全 御為不宜敷、殊御大切之 御役儀<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>之候得<sub>ニ</sub>ハ御家中衆・御奉公人ハ勿論、町郷<sub>ニ</sub>至迄御為を奉存<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>相慎<sub>ニ</sub>一統急度相心候様可被相達候、此段組下・支配下・召仕等迄も能々相守候様可被相達候」「御領分宿々は勿論往還筋之義とも本陣・問屋初馬士・駕籠舁<sub>ニ</sub>至迄右之処猶以相慎、旅人<sub>ニ</sub>対しかさつかましき義無理非道之筋無之随分相慎候様、其御役方より分<sub>ニ</sub>而急度申付候様可被相達候」とあり、「御百姓共急度御触面相守候様夫々御申渡可有之候」と勝五兵衛から世田谷御代官衆へ達せられ、さらに代官所から各村へ廻達したのである（三三項）。

井伊直弼の大老職就任に伴い領内の引き締めを計っているのである。

六月一八日には「京都御守護御勤被遊候<sub>ニ</sub>付、此度鞍馬口<sub>ニ</sub>而六千坪為御陣屋地御拝領被遊恐悦之御事<sub>ニ</sub>候」という触書が書き留められている（五六項）。

安政六年の「御用状留記」の四月二九日には代官所から「明朔日 弥千代様御里披<sub>ニ</sub>付今廿九日夕東御台所<sub>ニ</sub>相揃様可申付候」として、世田谷領から三七人（内二人は上野毛村）の人足が動員されている（二六項）。

一〇月一五日には「殿様今日御登 城被遊候処以 思召御筆之物<sub>ニ</sub>并交御着御頂戴被遊恐悦之御事<sub>ニ</sub>候、件之趣諸御屋敷御家中衆<sub>ニ</sub>可被相達候」と井伊直弼が將軍から賜物を受けたことが記されている（七八項）。

一〇月二八日には「殿様今日於 御座之御間 御懇之被為蒙 上意 御本丸御普請御用向を重立御取扱被遊候様被為蒙 仰恐悦之御事<sub>ニ</sub>候、右之趣諸御屋敷御家中衆<sub>ニ</sub>可被相達候」とあり、直弼が將軍から本丸普請につき上意を受けたことを伝えている（七九項）。

一〇月二九日には「殿様今日御登 城被遊候処、於 御座之御間、去ル十七日御本丸炎上之節早速御登 城被遊消

防其外御指図御行届、何角御骨折之趣被為蒙 上意恐悦之御事候、右之趣諸御屋敷御家中衆<sup>江</sup>可被相達候」とあり、本丸炎上の折、直弼が消防等の指揮をとり上意を受けたとある（八〇項）。これらの触は「御家中衆」のみならず代官所から領内全村に廻達されたのであった（八〇項）。

安政七年の「御用状留記」の正月七日には「今曉於奥方 御女子様御出生恐悦之御事候、件之趣諸御屋鋪御家中衆<sup>江</sup>可被相達候」と女子誕生の触書が出されている（四項）。

正月八日には「殿様御儀昨日御用番松平和泉守様より御奉書御到来、御血忌御免今日 御登城可被遊段被為蒙 仰恐悦之御事候」とある（四項）。

正月一日には「今日殿様御登 城被遊候所 御具足 御鋭之 御相伴被遊 御手自御熨斗御拝領御盃御頂戴被遊 恐悦至極之御事候」とあり諸屋敷の家中衆に通達している（五項）。

正月二三日には「此度於奥方御出生之 御女子様御名登代姫様と被遊候」とある（六項）。

このような藩主井伊家の私事に至るまで領内村民に情報を伝えていることが注目される。

さて、安政七年（一八六〇、万延元年）三月三日は井伊直弼が水戸の浪士に襲撃され暗殺された、いわゆる「桜田門外の変」にあたるが、このことに關する直接の記事はみられず、閏三月二九日に「殿様御病氣至而不被遊御勝御大切之御様子被遊御座候」とあり（五七項）、さらに「殿様御病氣被為及御大切候段達上聞為 御尋 上使堀田豊前守様を以御懇之被為蒙 上意恐悦之御事候」とある（五八項）。

同日に家督願が承認された旨の触書が出されている（五九項）。

殿様被為及御大切ニ付 若殿様<sup>江</sup> 御家督御願書御用番脇坂中務大輔様<sup>江</sup> 戸沢上総介様井御指添御先手中臈宇右衛門を以被指出候処、無御滞御請取相成御安心被遊候

こうして閏三月晦日に「殿様御病氣御養生不被遊御叶、今晦日卯中刻御逝去被遊奉絶言語候御事」候」と代官所の廻状が出されている（六〇項）。四月一〇日に世田谷村の豪徳寺に埋葬されたのであった。

（2）大場与一の世田谷領代官就任

嘉永五年の「御用書筆記」の一一月晦日には、世田谷村役人からの廻状で「今般大場家四郎様御儀御代官見習被仰付御勤役被為遊候間、此段御承知可被成候」とある（九九項）。

嘉永七年の「御用諸向留」の七月一七日には代官所からの廻状で「去ル十五日山田七右衛門、今度佐野・世田谷御代官<sup>五</sup>被仰付候間、御領分中不洩様申渡候様相心得可申候、右<sup>二</sup>付申談し祝儀<sup>一</sup>罷出候様可致候」とある（六〇項）。これは、彦根藩の地方行政の上で注目されることである。これまで、佐野領・世田谷領の代官は、地元の土豪を起用し、地代官制度であったが、この時から家臣の山田七右衛門を佐野・世田谷の二領の代官に任命し、地代官と家臣代官の併用体制をとったことになる。山田七右衛門は井伊家の江戸屋敷に在任し、地元の地代官と提携することによって関東の佐野・世田谷二領の統一的掌握を意図したものといえる。

安政四年の「御用状留書」の閏五月二六日には、世田谷村名主松本宗八からの廻状で「大場隼之助様御義長々御病氣之處、御養生不被為叶、卯上刻御卒去被遊奉恐入候、依之来廿八日ハッ時御出棺<sup>二</sup>付、御村々御同役様并永上金之もの一同麻上下御仕度都而先刻之御心得<sup>一</sup>御出可被成候」とあり、大場隼之助が去死し、二八日に出棺につき、名主と永上金の者は麻袴で出くるように順達されている（四〇・四一・四二項）。隼之助享年六九歳であった。<sup>五</sup>

七月二〇日には大場与一より「去十七日御代官本役被仰付候間右之趣相達申候、早々順廻留<sup>五</sup>可返候」という廻状が出されている（四六項）。

七月二七日には世田谷村名主松本宗八から「過日御達し有之候義ニ付大場様五恐悦之御祝儀ニ御村々御一同可罷出処、御内伺致し候所来ル八月五日被為請御祝儀候間、同日朝四ッ時上宿万屋幸右衛門方五御出勤之上、音物等之義御相談致し度候間」という廻状が出ている（四八項）。

この時の状況については、「諸事御用向留記六」の安政四年の八月六日に次のように記されている。

「七月十七日御代官与一様本役被仰付候御祝義式拾ヶ村一同八月五日恐悦ニ御宅罷出候、御樽料金壹兩差出候則為祝義と御吸物・御酒・御肴御馳走、本膳迄被下置候」とあり、これは「新例」であると書き留めている（一九項）。

同書には引き続き「右御代官与一様御新造御引移八月下旬頃御引取ニ付、九月九日御領分式拾ヶ村一同五為御祝儀と金四百足差上候得は、猶又御吸物・酒肴本膳之御祝義御馳走被下置、不残大酒いたし御祝申上候而目出度夫々共夜ニ入帰宅罷在候也」と記され（二〇項）、大場家四郎が代官見習から本役となり、名前も与一と改名し、さらに妻を迎え、領内名主らが祝儀におもむき、大変な馳走になったことが具体的に記述されている。

与一は荏原郡中延村鑛木善兵衛の次女、みさ（美佐）を妻に迎えた。与一は三二歳、みさは二五歳であった。<sup>(6)</sup>

### （3）触次名主父子の「不正」と弾劾

世田谷領の触次、猪方村名主重左衛門に関して不正問題が発生している。その動向を窺ってみよう。

嘉永七年の「御用諸向留」の一二月には、世田谷村名主宗八・弦巻村名主安太郎・用賀村名主麻二郎の三名の連名で世田谷村組合の名主へ廻状が出された（二〇七項）。

それによると「猪方村触次重左衛門之義ニ付、松原村沖右衛門殿・下北沢村土太郎殿私共五被申出候義有之、右ニ付御談合申上度義御座候間、来ル廿四日四ッ時迄ニ上町幸右衛門方五御不参無之御自身出席被下候」とある。



一月二十九日には、さらに「猪方村触次重左衛門一件先日御相談仕候通り、松原・下北沢兩人<sup>江</sup>参り相断候所、又候昨日右兩人罷越達<sup>而</sup>御一同<sup>江</sup>御嘆キ申上度段被申聞（中略）、右は内実駈と承り候廉も有之、旁右等之儀ニ付御相談申上度存候間、乍御苦勞明朔日朝五ッ時迄ニ上町幸右衛門方<sup>江</sup>御出会可被下候」として再度の会合がもたれた（二一〇項）。

「諸事御用向留記六」の安政二年四月一〇日には世田谷領一七か村の名主等から御鷹野御役所宛に猪方村触次重左衛門父子の不正につき触次役御免願書が提出された（三項）。長文なので、要約して紹介すると次のとおりである。

①武州多摩・荏原両郡村々世田谷領の内御鷹野役所の御用諸向の触当をしている猪方村触次重左衛門組合内の村一同が申上げるのですが、重左衛門ならびに同人悴見習善三郎の行状が親子とも近來、よろしからざる風聞等で一統の気受が悪く、諸向取計方に疑惑が生じ安心できない状態である。

②諸懸物雜用割の取集方の出銭高も年ごとに増額され、小前末々に至る迄疑念を生じているので、やむなく去年一月中にこれ迄扱ってきた諸帳面類を調査したい旨重左衛門へ申入れたところ、長年のことで留記等もわかりかねるとの返答であった。

③そこで再度懸合中のところ、世田谷領松原村触次沖右衛門、下北沢村触次土太郎、深沢村触次和歌太の三人の者が立入り、仲介したいということで、その意を尊重して示談したいと思っていたのだが、三人の解決法は、これまでの善惡に拘わらず重左衛門は退役、同人悴善三郎が跡役に就任することで勘弁してほしい。もしそれで済むなら今後は仲介人三人が不行届のないよう充分注意しようということであった。

④しかし、村々では、どうしても重左衛門勤役中の諸帳面類を取調べの上、解決方法を示してほしいと頼むと、それはできないと断わってきたので、しかたなく重左衛門へ直接懸合したが、適当な応答のみで、応じようとはし

なかった。

⑤すでに先年村方川除領主普請仕立方のときにも「押領筋引続両三度」に及び「私欲向調中」名主役取放になった「邪欲之もの」につき一同暫時も安心できない状況である。恐れ入ることですが、やむをえざることで、今般重左衛門と倅見習役善三郎兩人の触次役を罷免下さるようお願いしたい。跡後は組合内世田谷村名主新兵衛方を任命下さるよう一統ご憐愍のご沙汰をお願いする。

この願書をもって御鷹野役所の御掛りの満岡・森内の兩人に出頭したところ、早速願書は預りになったが、願筋取上げの吟味とはならなかった。訴答共一応調べたが却下され、どうしても吟味を必要とするならば、領主役場の添簡をもって出願するよう指示された。

そこで世田谷領の在府代官多和田久平様へ願出、多和田より佐野奉行青木津右衛門へ相談し、奉行より願意の趣きを具体的に書いて提出するように仰せ渡され、左記の願書をもって出願した。すると早速五月三日猪方村重左衛門と倅善三郎の兩人と差添人として年寄文平の三人が招呼れ、奉行様の永屋で御糺しがあり、その結果内済するよう厳重に重左衛門と善三郎の兩人へ申渡された。

そこで、先の懸り下北沢村土太郎・松原村沖右衛門・深沢村和歌太のほかには中目黒村金吾・桐ヶ谷村宇右衛門・大井村貫藏・同村年寄惣左衛門・渋谷村半藏共、都合八人が立入りで取扱いについて一任された(三項)。

安政二年四月には井伊家御領分一七か村惣代世田谷村名主宗八ほか四か村四人の名主より代官所宛へ願書を提出した(四項)。この願書も長文なので、要約を紹介すると次のとおりである。

①御鷹野役所へ今般出願した世田谷領壹万三千石の内、私共村々の触次役猪方村重左衛門と倅見習善三郎の勤役料は石高割をもって村々より給料米を差出しているが、この兩人は近來「身行不宜風聞」があり、触次役を安心して

て勤めさせておくことができないので、常々村々共、この兩人の行状を見聞してきた。

②御用として出府するたびに「遊興・誇り」滞留し、その分まで「御用出之趣取計候様子」で、その遊興分まで「御用懸り」の雑用費に繰り込み、村々へ割り当負担させているので、近来は「年増村々出銭高嵩」み小前々まで一同難渋している次第で同領内の外の組合村々の負担と比較しても「多分之相違罷在候儀」につき、この重左衛門の取計いの具体的内容を申上げる。

③去寅年（安政元年）春中、異国船渡来の節、御鷹野役所で臨時の焚出し御用の人足が世田谷領ほか四か領共一同に仰せつけられたが、世田谷領御領分村々は「御屋敷様御備御用人馬」を任務しているので「皆式御免願」を出願した。このときの費用として、「出府雑用金拾兩程出銭割取集候分」は一体何の雑費にかかったのだろうか疑問である。右御免願いとして兩三度も出府しただけであり、これは重左衛門親子共「邪欲」をもって取立たと思われる。

④嘉永元年の「小金原鹿 御狩御習試御用駒場野御場所拵出勤人足」は世田谷領・馬込領・六郷領・品川領・麻布領共五か領より相勤めた人足は平均に負担した。世田谷領の内猪方村組は「多分過勤・相成候・付」ほか組合より過勤人足分賃錢四五貫文余（六拾貫文余受取候分）と追記がある。「取込置候様子（中略）私欲罷在候哉御座候」。

⑤駒場原御定式御場拵御用人足へ毎年支給される扶持米の分は「正米渡之外代銀」をもって渡されてきたが、「代銀」分はこれまで村方へ渡されたことがなく、これも重左衛門が「取込罷在候義・有之哉」、このことは父善次郎勤役以来「押領」してきたものと思われる。

⑥毎年一〇月より翌春二三月頃迄、「御挙場内鳥殺生人御取締御用御出役様方」が村々を廻村し、その休泊雑用兩人分宿泊料金一分、御昼食料一昼夜分金一分二朱ずつと決まっていたが、度々重左衛門方へ休泊しており、「多

分之出銭割年々取立候義一同疑惑罷在候」。

⑦去る嘉永四年春中、一ツ橋刑部御樣玉川筋登戸辺枳形山へ御出の節の「雜用割錢多分相掛り候義疑惑罷在候」。

⑧両御丸御小納戸御用杉の葉上納その外諸納物については、買納め上納しているが、その「代錢割合取集之義も、重左衛門方へ多分之私欲筋有之候様子御座候」。

⑨触次勤役については組合村々より相当の給分が支払われているが、出府は勿論そのほか出張はすべて出府と名目をつけ、一昼夜分金一分ずつとして「諸向割合等取計候時々雜用割一同取立候始末何共難波至極仕罷在候」。これらの箇条書をもって、代官所から重左衛門父子の触次役「御免」を御鷹御役所へ出願してほしいと願ひ出たものである。

この「願書」を受けて、代官所では五月三日に重左衛門父子共を呼出し「御糺之上、嚴重之御利解被仰聞候上内済可致旨被仰渡候」として、前述の八人の触次役を内済の仲介人としたのである。御鷹場役所も井伊家佐野奉行・代官所とも領主権力が介入するのではなく、村方内部の内済示談で解決するようすすめているのである。

安政二年の「御用向留記」にその前後事情が記載されているので簡単にみてみよう。

三月四日には世田谷村名主宗八・用賀村名主麻次郎・野良田村名主与一・右衛門・岩戸村名主源藏の四名で「組合触次一件付御相談申度義御座候付、来ル七日晴雨共正四ツ時上宿幸右衛門方御出会可被下候」という廻状が出されている(一二項)。

三月一日には左記四か村のうち岩戸村名主源藏の代わりに弦巻村名主安太郎・和泉村名主作兵衛が入り五名の連名で「触次一条付去七日御相談御座候通、昨十日先方へ罷出申入候処、尚又種々被申聞候義御座候付得と御相談申上度候間、来十三日晴雨共朝五ツ時迄喜多見村野田屋清兵衛方へ御出会可被下候、右就御他領組合村々にも出会

触置候間、此段御承知之上御自身御出会可被下候」とある（一五項）。これによると、猪方村触次重左衛門方へ出向き諸帳面の公開等を要求したが、重左衛門が種々申述べ公開を拒否したので再度会合をもつこととしたことが判る。この際、井伊家世田谷領のみではなく、同じ触次下にある他領の組合村々にも参加を求めたとあり、呼びかけ人に和泉村名主作兵衛が加わっているのもそのためといえる。

三月一八日には世田谷村名主宗八からの廻状が出され、「触次一条先達<sup>（立脱カ）</sup>野田屋<sup>ニ</sup>而出会之義<sup>ニ</sup>付、昨日喜多見村八郎兵衛殿、小足村年寄衆一昨日出会被罷越被申聞候は、兼被仰聞候趣篇と相談御座候処、一ト先重左衛門勤役中諸帳面取調之上、善惡とも役義之儀は三四ヶ年相延可然哉<sup>ニ</sup>存候、且ハ往古<sup>ニ</sup>組来之處、只今離組<sup>ニ</sup>罷成候<sup>ニ</sup>而は、向後諸事御突合等<sup>ニ</sup>差支候付、<sup>（右左）</sup>も前書御聞濟被下度、然ル上はいづれ<sup>ニ</sup>も御相談相洩間敷旨被申聞候間、則不取敢此段得貴意候」とある（二〇項）。

ここで重要なことは、井伊家世田谷領以外の喜多見村・小足立村は、まず重左衛門勤役中の諸帳面を調査した上で、善惡とも触次退役要求は三、四か年延期した方がよいという見解を示したこと、これら両村は猪方村組合から離組の意向をもち、それを世田谷領村々で思いとどまるように説得していることである。

四月七日には用賀・弦巻の両村から瀬田・上野毛・野良田の三か村に宛て「猪方村触次一件<sup>ニ</sup>付御相談申上度義御座候間、唯今<sup>ニ</sup>上町へ御出張被成下候様奉願上候」という紙面をもった使者が廻村している（二八項）。至急の相談であると思われるが、その内容は不明である。

四月八日には用賀・瀬田両村より「猪方村触次一条之義<sup>ニ</sup>付差懸り御相談申上度儀御座候間、乍御苦勞様明九日朝正四ツ迄<sup>ニ</sup>世田谷村茶屋幸右衛門方<sup>ニ</sup>御出会可被下候」という廻状が出ている（三一項）。

四月二七日には、弦巻村安太郎・用賀村麻次郎・瀬田村綱次郎・和泉村三給惣代作兵衛の四人連名で「御屋敷佐野

御奉行様も今日被仰付候は、村々名主共名代不相成自身ニ而一統明後廿九日朝五ッ時迄ニ御屋敷五一同相揃候様ニ被仰付候ニ付御一同明廿八日夕刻迄ニ麴町上野屋五向々御村々御一同御出勤可被成候」という廻状が出された(三二項)。

佐野奉行は先述のとおり、ここで内済示談で解決するよう命じるのである。

五月二四日には世田谷・弦巻・用賀・野良田・瀬田の五か村名主より「猪方村触次差縫之義内済熟談行届候ニ付、兼先日申上置候以来取極規定書連印致候間、銘々御印形御持参明後廿六日朝四ッ時喜多見村野田屋清兵衛方へ乍御苦勞御出席可被成候」という廻状が出され(三三項)、ここに触次一件は解決することとなったのである。結局触次重左衛門と悴善三郎兩名の退役となったのである。

六月二六日の弦巻・用賀・瀬田三か村名主の次の廻状(三九項)でそのことは判明する。すなわち「触次重左衛門并悴子善三郎兩人共退役仕候対談ニ取極り候」とある。この「触次差縫一条」にかかった費用総額は五〇両で、それを関係組合村々で負担することとなったが(四三項)、九月二四日でも、その負担をめぐって相談の会合がもたれている(六一項)。

重左衛門の後任は安政二年九月から寛東村名主孫七が就任した。井伊領ではない寛東村名主が任命されたことが注目される。

安政四年の「御用状留記」の安政三年十二月二日には寛東村孫七からの廻状で「猪方村重左衛門殿勤役中触次筆墨代米之義、去卯(安政二年)年正月6八月迄之分同人五御渡被下候様仕度候趣ニ付、仕訳帳持参被致候間、去卯年極月中御達し申上候所未タ御遣し不被下候御村々御座候趣ニ付、(中略)又々此段申上候」とある(六項)。この一件が暫く尾を引いていることがわかる。

## (4) 上野毛村名主七左衛門の功績と褒賞

安政五年の「御用状留記」の五月一七日には世田谷御領分上野毛村名主田中七左衛門が「御領分御百姓共龜鑑」として「帶刀御免一本紙」を申し渡された(九六項、なお同一文が「諸事御用向留記六」の三九・四〇項にもある)。それによると七左衛門は「六拾四ヶ年名主役無滯実跡ニ相勤、殊ニ在村ハ不及申御領分村々為方ニ相成候義を平日厚致懸念、小前之もの共ニ統氣請宜敷村方為方ニ相成、猶又去ル子年 御調達金被 仰出候砌御時節柄厚相弁、永上金其後辰年同様被 仰出候砌 御調達金等致し、其節々御扶持方等も頂戴いたし居候得共、全平日心得方宜敷稀成ものニ付、御領分御百姓共龜鑑ニ相成候趣佐野奉行衆被申聞候間、他所行并非常之節 帶刀 御免、一本紙可被申渡候、以上」として、家老三浦内膳から筋奉行衆・佐野奉行衆・御元方勘定奉行衆・御賄衆・御目付衆に出され、五月一九日佐野奉行勝五兵衛より在村代官山田七右衛門立合の上、奉行所長屋で申渡された。しかし、この時七左衛門は病氣のため悴左太郎が出席し、年寄要次郎が差添人となった。

帶刀と一本紙(一本紙とは「宗門改帳」が田中七左衛門家だけは別格扱いとなり、田中家だけの「宗門改帳」が作成される)を許された七左衛門は寛政五年(一九七三)の一六歳で名主役に就任し、安政五年(一八五八)の八〇歳まで、六五年間勤役してきたのある(「諸事御用向留記六」三九項)。その間永上納金三〇〇兩、調達金一〇〇兩を提供し扶持米を与えられてきた。

しかし、この七左衛門も安政六年一月一八日に八一歳で死去した。そこで八一歳の現役のまま死去したという事実を公的には隠して、まず隠居願と名主跡役に悴左太郎を出願することとした。井伊家では七左衛門隠居に際しては井伊家所領の近江国・下野国・武蔵国三領においても六五年間名主役を無事勤務した者はないとして褒美として金二〇〇兩を与えて、安政七年正月一七日に死去したこととした。その間の事情を「御用留」の記録から窺ってみよう。

安政六年十一月八日に七左衛門が八一歳で死去すると悴左太郎は早速、親類の野良田・用賀両村の名主に知らせたところ、「相談之上、是迄名主勤役中ニ付当節老病重軀ニ罷成候間、御役御免隠居被 仰付候様」の願書を認め、翌一九日に野良田村名主粕谷与一右衛門・用賀村名主飯田麻次郎の兩人が持参し世田谷代官大場家へ差出した。勿論大場代官へは「内々七左衛門義ハ昨日病死仕候段申上候所」、代官より葬式はとりあえず「仮葬之積ニ而」行ない、いずれ「本葬式ニ可仕段被仰聞」、さらに「御屋敷正願出候義ハ来月上旬迄差控候様被 仰聞」、それまで大場代官所で願書は預ることとした。なお、「帯刀御免、一本紙」の身分格式は悴左太郎にも引継がれるよう配慮された。十二月一日に年貢上納の折に大場代官より佐野奉行へ、七左衛門の隠居と跡役願の願書を提出すると、その願書を披見した上で、奉行から「七左衛門義ハ数年来名主相勤候所、三 御領分ニ耆人も無御座稀成者ニ付、以 御憐愍ヲ帯刀 御免、一本紙永久御免被仰付候義ニ付、別段書面を以奉願上候ニハ不及候段被 被仰聞、右願書差戻シニ相成候上、七左衛門御役御免隠居被 仰付」られたのである（諸事御用向留記六 六六項）。跡役の願書は提出するよう求められ、安政六年十二月名主田中七左衛門・年寄良蔵の連名で代官所へ提出した（同六七項）。十二月二十七日「御家老様御役御免隠居被仰付、右七左衛門義六拾五ヶ年名主役相勤候段三御領分無御座稀之義ニ付、以 御憐愍御褒美金貳百疋頂戴被 仰付候」となった（同六七項）。

十二月二十七日には家老岡本半介から佐野奉行衆・御元方勘定奉行衆・御賄衆・御納所役衆に宛て、「上野毛村名主田中七左衛門八十一才」へ「金貳百疋」の「御褒美金」下付の書付が出されている（同六八項）。

翌二八日には代官所から田中七左衛門悴左太郎に対し、「右之もの御用弁ニ相成候ニ付名主役申付候間、御用向万端年寄共と無服職申談大切ニ相勤可申候」と跡役名主の任命が行われた（同六九項）。

このように無事一件が落着いたので、十二月二十九日には七左衛門・左太郎兩人の御札として第7表のような金品を



第7表 名主役任命等につき「御礼」一覧

提 供 先	金 品
代官 大場様	金200疋 七左衛門御役御免御礼 金300疋 左太郎跡役任命御礼
代官 山田様	金200疋 七左衛門御役御免御礼 金300疋 左太郎跡役任命御礼
佐野奉行 勝様	御菓子（赤坂御門前船橋や 上金米糖・上羊羹五さを両品折詰） 七左衛門御礼 干海苔上三帖（680文） 左太郎御礼
御上屋敷 御元方 同 御賄様 同 御納戸様	手札持参御礼奉申上候 同 同

関係者へ提供している（同六九項）。

それによると、代官大場・山田の兩人には金五〇〇疋ずつ、佐野奉行には菓子折詰と干海苔上三帖であるが、菓子折詰は差戻され、結局山田代官に提供している。この佐野奉行への謝礼は山田代官の「御差図被下置候」になっている（同六九項）。

こうして前述したように安政七年正月一八日名主田中左太郎より代官所へあて「御領分上野毛村田中佐太郎奉申上候、私父七左衛門儀度々御褒美頂戴被 仰付冥加至極難有仕合奉存罷在候、然ル所老病追々差重り今朝五ッ時頃相果候ニ付、此段以書付御届奉申上候」とある（安政七年の「御用状留記」三項）。

それから七か月後の万延元年七月七日左太郎は七左衛門と改名した（同一二〇項、「諸事御用向留記六」七二項にも同文がある）。

#### 四 自然災害と小前騒動

##### （1）六郷用水の渇水

嘉永五年「御用書筆記」の四月二二日には世田谷代官所から六郷用水の「発端年曆」の判明する史料や「古絵図」の存在を調査する

廻状が出ている（三四項）。

六郷用水発端年暦相分候様之書面等も有之候ハ、当節急ニ入用ニ候間相尋申度、其外古絵図面等も候ハ、承度、尚又水計口迄之水道之事も致承知度、何<sup>ニ</sup>も右心得ニ相成候書物有之候ハ、今日中又は明朝迄ニ被申聞候様致度此段相達候、即刻順廻留<sup>ニ</sup>可返候、以上

子四月廿二日

御代官所印

これをみてわかるように、幕末期には、近世初期の慶長年間（一五九六―一六一四）に開発された六郷用水の事情等を解明する史料等が世田谷代官所にも存在しなかったのである。

同年六月二日には六郷領用水路惣代から、日照り続きで用水不足となり、世田谷領村々は「五分通」り水が田場に行届かず、相談の結果明三日朝より六日朝迄、三日三夜の間「半留」にすることとしたので明三日朝、分水口へ立合ってくれるようにとの廻状が出されている。六郷領用水路惣代は、明三日朝六ッ時に六郷領を出立し、上流に向って登るので、各村役人は一人ずつ分水口へ出張してくれるよう書き添えている（四八項）。

五日には再度六郷領用水路惣代からの廻状が出され、六郷用水の「下手村々田場乾割ニ相成候間」さらに明六日から八日までの二日間、世田谷領においては「分水口皆留又は半留等」の延長が依頼された。二日間延長されれば「乾割之場所<sup>ニ</sup>根走水ニ一順可相廻」としている（四九項）。それから半月後の六月二日は、またまた日照り続きによる「用水不足」で「当領村々流末田場乾割ニ相成候ニ付」として明二日から二八日朝まで、五日間世田谷領「村々分水口五分留」と、そのため「明日地先<sup>ニ</sup>御老人」の出張願いが出された（五一項）。

しかし、幸いにも六月二日には「朝明ヶ方小雨昼頃迄少々強くふり夕方曇天、漸々埃示りくらい」があったようであるが、これも実質的には大した効果がみられなかったようである。

六月二七日には六郷用水路惣代領村名主周藏・萩中村名主三右衛門・北蒲田村名主次郎左衛門外二名の差出し廻状が出されている。それによると、去る二三日から明二八日朝まで世田谷領「村々分水口五分留又は皆留等」御無心申入候、精々為引取候得共流末村々田場大乾割（非）不行届、無是悲明日用水配御出役相願、来月朔日（非）皆留（非）いたし候間、此状御披見次第築留取払、明後廿九日夜迄御勝手次第沢山御引取置可被成候」とある（五三項）。すなわち、七月一日より世田谷領の分水は全面閉鎖とするので、六月二七日から二九日までの間は存分に水を取り入れて結構であるという内容である。六月二九日には北蒲田村御用先より幕府代官斎藤嘉兵衛の手代原俊蔵より次の廻状が出された（五四項）。此節照統六郷領村々用水難行届田場干破相成候（中略）明朔日朝六時北蒲田村旅宿出立其村々（非）罷越、分水樋口同朝（非）来ル六日朝迄日数五日之間メ切封印申付候間、村境（非）役人之内耆兩人三判持参罷出居差支無之様可被取計候。

さらに七月九日には斎藤嘉兵衛手代原俊蔵より、六郷領村々渴水につき世田谷領村々分水口メ切差配したけれども、なお「渴水（非）不行届稲草干枯等出来候（非）は不容易儀（非）付、明十日朝六時北蒲田村出立罷越、同朝（非）来ル十七日朝迄日数七日之間猶又其村々分水口メ切封印申付候」（五六項）として七月一〇日朝より一七日朝まで七日間の分水口閉鎖を命ぜられているのである。この分水口メ切については村方から「請証文」を提出させているのである。

上野毛村では、平五郎・善吉の二か所の分水築留をしている。その他の分水については七月一日以来メ切りのままになっていた。

七月一八日には、六郷領堤方村御用先の斎藤嘉兵衛手代原俊蔵からの回状で、明一九日朝六ッ時より来る二六日朝六ッ時まで七日間の分水口のメ切封印の命令が出された（五八項）。

こうしてみると、「六郷用水」の名前のとおり、下流の六郷領の水田稲作のための水の確保が最優先で、世田谷領は

第8表 嘉永5年6月～7月 世田谷領における六郷用水分水口留状況

廻状日付	期 間	日数	世田谷領村々 分水口	六郷領村々の 状況	廻状差出人	項目 番号
6月2日	6月3日朝 ～6日朝	3日3晩	半留		六郷領用水惣代	48
6月5日	6月6日朝 ～8日朝	2日間	皆留又は半留	田場乾割	六郷領用水惣代	49
6月22日	6月23日 ～28日朝	5日間	五分留	当領村々流末 用水不足	六郷領用水惣代	51
6月27日	6月27日～ 29日	3日間	6月27日～29日 存分取入自由		六郷領用水惣代	53
6月29日	7月1日朝 ～6日朝	5日間	皆留ノ切封印	流末村々田場 大乾割	代官齊藤嘉兵衛 手代原俊蔵	54
7月9日	7月10日朝 ～17日朝	7日間	皆留ノ切封印		代官齊藤嘉兵衛 手代原俊蔵	56
7月18日	7月19日朝 ～26日朝	7日間	皆留ノ切封印		代官齊藤嘉兵衛 手代原俊蔵	58

〔御用留〕の性格と内容（五）（森）

取水口でもあり、上流であるが、六郷領に支障のない範囲での利用にしか過ぎなかったことが判明する。

さて、五八項の末尾には、七月一九日昼頃より雨が降り初め、大雨が毎日続き二日夜より出水、二二日昼頃本田畔より水が押入、追々増水となり、ついに「稲之穂際頃まで附」という状況となった。

以上六月三日から七月二六日までの分水口留状況を表示すると、第8表のようになり、三三日間中二九日間（八八％）が半留ないし全留であったことがわかる。

また、半留（五分留）の要請については、六郷領用水路惣代（嶺村名主周蔵・萩中村名主三右衛門・北蒲田村名主次郎左衛門外二名）からの回状であるが、皆留のノ切封印については代官齊藤嘉兵衛手代原俊蔵の回状となり、これには村方から承諾の請書が提出させられている。

嘉永六年「御用状留記」の二月二五日には代官齊藤嘉兵衛手代秋葉金次郎より、「武州六郷・稲毛川崎領村々用水路定式自普請所為目論見、明廿六日其筋廻村見分いたし候条」として「両懸耆荷 此持夫耆人」の人足差出しを命ぜられている（一）

二項)。

六月一日には六郷領用水惣代より「此節照統六郷領用水不足流末村々乾割ニ相成草耕出来不申、依之其御村々分水口御示談之上明十二日と十九日朝迄七日之間五分留ニ致度、明朝用水惣代之もの罷出可申間左様御承知可被下候」という廻状が出されている(七二項)。すなわち、六月一二日から一九日朝までの七日間の分水口の五分留(五〇%閉鎖)要請である。

六月二七日には再度六郷領用水路惣代より「明廿八日より七月五日朝迄七日之間其御村々分水口五分留ニ御示談申度候間御承知可被下候」との廻状が記載されている(七六項)。

七月六日にはまたも六郷領用水路惣代より「明七日朝々来十日朝迄三日之間其御村々分水口皆築留之儀御頼申入(中略)、尤明日地先正御役人中御出会之義御頼申入候」という廻状が出されている(七七項)。

七月一二日には代官齊藤嘉兵衛手附杉浦武助より「其村々分水口昨十一日と七日之間メ切申付封印いたし置候処、昨夜々之沈雨ニ而惣体用水沈深致趣届出、依之右メ切ヶ所々取払申付候」との廻状があり(八〇項)。九日の大雨で用水が充滿したので、分水口閉鎖の解除令が出されたのである。

ところが八月二日は六郷領用水路惣代より、「明三日と十日迄七日之間其御村々分水口皆留ニ御示談申度候間御承知可被下候」という廻状きている(八六項)。

嘉永七年「御用諸向留」の二月二七日には代官齊藤嘉兵衛手附永井良之助より「六郷領用水自普請所見分として致廻村候間、人足一人を提供するよう廻状が出されている(二五項)。毎年二月下旬には、六郷用水自普請所見分役人が派遣されているのである。

七月一三日には六郷領用水路惣代より、「此節照統及渴水用水不足いたし、当領流末村々田場乾割ニ相成候間、明

十四日朝五ツ時より来ル十九日朝五ツ時迄五日の間、其御村々分水口皆メ切之義御頼申入度候間」という廻状が出された（五九項）。

閏七月八日にも六郷領用水路惣代より「此節追々照統用水不足当領流末村々出穂水行届兼候間、明九日朝より来ル十四日朝迄日数五日之間、其御村々分水口樋口皆止之積り御示談申受度」という廻状が出されたが、「翌九日雨水ニ付見合触」が順達された（六五項）。

安政三年「御用状留記」の正月二七日には代官斎藤嘉兵衛手代南条助一の堤方村御用先から「六郷領三拾五ヶ村組合用水取入口井井筋当辰春定式自普請目論見として罷越候条」との廻状が出されている（二項目）。

五月二四日には六郷領用水路惣代から「此節用水不行届流末村々田場乾割未仕付残、且仕付荒ニも可相成次第ニ而領中村々及混雜御差配御出役をも可相願処一ト先其御村々分水口明廿五日朝より来ル六月三日朝迄日数七日之間五分留御示談申度」との廻状きている（三五項）。

六月二日には六郷領用水路惣代より、「猶又明三日朝六ツ時より来ル八日朝六ツ時迄日数五日之間其御村々分ヶ水口五分留御示談申度」とさらに五日間の延長申入れの廻状が出された（三七項）。

六月一三日には代官斎藤嘉兵衛手代田籠宮幸助より用水路へ塵やごみを捨てたる者への取締が出されている。すなわち、

「其村々地内引入候六郷領用水路、今般下鄉村々田方用水差支容易不成封印まで取計置所、兎角愚眼之もの共右大切之用水路<sup>五</sup>ちりこみ捨候もの有之以外之事<sup>五</sup>候」とある（四四項）。これは、六郷用水が下流の六郷領村々の利用が重視され、上流の世田谷領村々の利用が軽視されていることから、「ごみ・ちり」等を投げ捨てるものがあつたのである。

翌六月一〇日には、同人より「来ル十六日朝六ッ時封印取払之積申渡置」の廻状が順達された(四五項)。

安政四年の「御用状留記」の五月三日には上野毛村名主七左衛門が六郷領用水路惣代中に宛、用水破損の見分と修復措置を要求した文書が記載されてある(三一項)。それによると、「当村用水路之内、昨辰秋中村方におゐて急水留いたし置候危難之場所、当節破損罷成用水堀押抜可申も難計候哉<sup>ニ</sup>付、此段御見分之上可然御取計被成可然、此段申上候、早々以上」とある。しかし、これは充分の措置講ぜられなかつたようで、八月一〇日の記載に「去月十三日頃大破ニ押崩候付、同十八日御築留御座候様子之処、同月廿二日夜中如何之御手入御座候哉、同月廿二日と廿三日共終日之大雨故歟、押抜相保不申(中略)、一昨八日昼頃昨九日夕方迄<sup>ニ</sup>用水敷悉欠崩甚數大破損候間右御達置申候、先は右御知らせ申度如此御座候、早々以上」とあるが、これは、「先ッは見合ひ不申遣候事」とあり、結局、提出しなかつたようである(五一項)。

安政五年「御用状留記」の三月二八日には代官小林藤之助手附平野丈助より「六郷領組合用水路出来栄見分として明廿九日罷越候条」とあり(一七項)、やっと上野毛村の用水路修復されたことが判明するのである。

安政六年「御用留記」の六月一八日には御出役竈宮幸助より「照統六郷領水不足<sup>ニ</sup>付、今十八日と廿五日朝迄七日之間分水留之事」が示達されている(三九項)。

六月二五日には、代官小林藤之助手附平野丈助より、「六郷領三拾五ヶ村組合用水猶水配いたし候<sup>ニ</sup>付、明廿六日曉六ッ時より来月朔日明六ッ時迄中五日之間其村々分水口メ切置封印いたし候間、被得其意右刻限<sup>ニ</sup>堅メ切置夜番人附置都<sup>ニ</sup>付不取締無之様可被致候」との廻状が出されている(四二項)。

以上が、本書に収録されている六郷用水関係の記事であり、結局大別して、一つは分水口留、二つは用水路自普請所目論見廻村、三つは用水路の破損と修復であるが、大半が分水口留に関するものである。

(2) 安政の大地震・大風雨・米価高騰

① 安政二年の大地震

世に「安政の大地震」といい、大正一二年（一九二三）の「関東大震災」以前の大地震は安政二年（一八五五）一月二日夜四ツ時（午後一〇時）に発生した。

その地震のすさまじさは、「諸事御用向留記六」の同年一〇月四日に次のように記載されている（五項）。

安政二卯年十月二日夜四ツ時頃大地震ニ付、石橋より崩坂稲荷石鳥居額輦より落其外墓所石塔不残ゆりたおし、人家戸障子等損、稀成大地震ニ付、江戸表杯は所々出火いたし潰家等夥數、其上即死人焼死怪家人甚數趣、誠以御当地ニ而は希代之地変災難ニ付、左之通御屋敷も御沙汰触出候事

江戸市内の惨状が伝えられている。圧死・焼死者は公式報告のみで七〇〇〇名で、震源地は、それぞれ遠州灘、土佐沖、江戸川下流であった。

一〇月四日には、この地震の被害調査が実施され、上町名主宗八より「一昨二日夜大地震ニ付、怪家人并潰家其外玉川筋村々之義川縁欠損候場所所有之候ハ、取調有無とも今四日七ツ時迄御役宅ニ無不参御申出被成候様可申達旨、被仰渡候間御達申上候」とあり、これに対し、猪方村年寄文平・上野毛村名主七左衛門から同日付で代官所へあて「兩村とも何子細無御座候間此段奉申上候」と回答している（五項）。

さて、世田谷領村々では地震の被害は軽微であったが、江戸の井伊家屋敷は大きな被害を受け、早速領内村々へ材木の確保と大工調査が開始された。

安政二年の「御用向留記」の一〇月四日には「急御用」として、江戸屋敷の山本宗十郎から世田谷代官大場隼之助・



同家四郎に宛て書付が達せられた(六六項)。それによると「此度大地震ニ付御屋敷大損シニ相成忽外圍并御家中衆并住居難相成ケ所御手当方ニ御入用板類売上、当地之向公辺御入用之様ニ相聞候得共、忽御差支ニ相成候間、世田谷御領分内ニ有之杉六分板ハ勿論其余松杉之板は一切他<sup>五</sup>指遣し候義ハ御差留、其内右杉松六分板一刻も早ク御屋敷<sup>五</sup>差送り候様御取計可有之、右ハ売上ニ相成候儀有之跡之所ハ如何様共御取計ニ可相成候間、持掛之処御不都合無之間早々御取計御指廻し可有之候」というもので、世田谷領分内の杉松は、井伊家優先で、他へ出すことは幕府といえども禁止するといふものである。

こうして、領内の農間材木渡世人の所持の「木品」と大工の調査が実施された(「諸事事御用向留記六」五項)。これはいうまでもなく、地震によつて潰滅した江戸町方の再建準備である。

翌五日に上野毛村名主七左衛門は代官所に対し、「大工当村ニは無御座候」とともに、重右衛門が杉の四分板二〇坪程と杉丸太一〇〇〇本余を所持していると報告している(同六項)。早速杉四分板二四坪、杉丸太一二〇〇本を御普諸作事方へ上納させられ(同七・八項)、その代金として八両余が支給された(同九項)。

一〇月五日には、井伊家に対し幕府御使番が出張し「御懇之被為蒙 上意恐悦之御事ニ候」という記事みられる(安政二年「御用向留記」七四項)。

一〇月五日・七日・八日の各日とも世田谷領内から五〇人ずつの人足を「地震ニ付取片付御用ニ付御作事方<sup>五</sup>相詰可申」と徴発されている(同六九・七〇・七二の各項)。

一〇月二一日幕府は「公儀御触書写」として「此度江戸表地震出火ニ付、材木其外之諸色商人共在方<sup>五</sup>注文申遣候は、元直段成丈下直ニ売出運賃等決<sup>五</sup>而引上ケ申間敷候、若無謂高直ニ致候もの於有之ハ可為曲事もの也、右之趣御料ハ御代官、私領は領主・地頭も不洩様可相触候」と示達している(同七七項)。

一月には「公儀御触書写」として「此度地震ニ付御府内潰家・類焼等多有之候ニ付而ハ、万石以上の面々を始精々手輕ニ普請可致旨被仰出候、右ニ付而は左方宿村は猶更之義ニ付、潰家等ニ而無拋家作致候とも弥以手輕可致候、若相背ニおいてハ咎可申付候、右之趣御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭ハ急度可申付候、右之通り関八州ニ領分・知行有之面々江可被相触候」と家作等の手輕普請を指令している（同八三項）。

一月には、地震につき「浮説」取締の触書を出している。次のとおりである（同九二項）。

#### 大目付江

近頃兎角浮説を立、見越之事杯相唱、中ニは不容易儀杯も有之哉ニ而以之外之事ニ候、此度地震ニ付而ハ猶更其虚ニ乗し種々之義申ふらし候ものも不少、依而ハ各衆人疑惑を生し金銀取引迄も差響不融通之由、於公儀御救助筋等厚御配慮も被為在折柄別而正実ニ可心懸処、却而人心を誑惑為致候始末は重々不埒之至ニ候、以後右様之義聞ゆるニおいてハ糺之上嚴重之沙汰ニ可及条、聊心得違無之様可致候、右之趣町奉行江相達し候間、為心得向々江最寄江可被相達候

#### 十一月

このように町奉行へ達せられた触書が村方へも廻達されているのである。

#### ② 安政三年の大風雨

ついで安政三年八月二五日には大風雨で井伊家世田谷領内で一七七軒の家が潰れるという甚大な被害が発生した。

八月二七日には上野毛村名主七左衛門から代官所と御懸り御鳥見様に宛て「去廿五日夜大風雨ニ付御制札吹潰并平五郎と申もの居宅吹潰候外、右同様大破損ニ罷成當時住居難出来もの三軒、其外物置・家・下肥屋之類相損難洩至極罷在候もの共多分御座候」として届出た（同一二項）。

この台風被害については名主七左衛門が次のように記録している（同一二項）。

右嵐之義は近代ニ稀成大風ニ付、自分方ニ而も立木杉之分凡百本余吹折、庭ニ罷在候松木七尺余廻り候老本之分根漕ニ吹倒、書院之家根棟ヘ懸り屋根損候上右片付木伐手間三人懸ル、其外杉木取片付、右為見分と御代官大場家四郎様・御中屋敷内山田七右衛門様御兩人ニ而御見分濟之義、八月晦日当村ニ瀬田村ヘ御越被成候事、翌巳年（安政四年）正月九日村々吹潰候もの共上町御役宅ニ被召呼候ニ付、当村平五郎召連倅左太郎罷出候処、拾ハケ村ニ而潰家都合百七拾七軒<sup>五</sup>御米老俵ツ、被下置候、外御代官大場隼之助様ニ付五升被下置、合老人ニ付老俵五升ツ、頂戴罷在候、難有仕合（中略）被下置分共俵数高百九拾九俵五升

先例としては「文政六末年八月十七日夜大風<sup>ニ而</sup>当村長五郎居宅吹潰候節、御米老俵宛老軒ニ付頂戴被下置」たことがあったと付記している（同一二項）。

安政三年の「御用状留記」の八月二八日には代官所から「潰家之義早々見分可致候ヘ共先取方付候様可申渡」とあり（五六項）、翌二九日には野良田村名主与一右衛門から「今日山田七右衛門様風潰家御見分御廻村被遊候ニ付、今日弦巻村始当村迄相済候間、当村<sup>五</sup>今晚御旅宿被遊明朝小山村始其御村々<sup>五</sup>御越し被遊候ニ付、此段御通達申上候」として井伊家世田谷領の在府代官山田七右衛門が潰家の状況視察にきている（五七項）。

八月晦日には関東御取締出役から寄場役人物代中に対し被害調査の書上げを命じている（五九項）。

今般風災ニ付<sup>ニ而</sup>ハ其組合村々潰家破損・人牛馬怪我等<sup>并</sup>田畑之様子、且場所ニ寄暫時水入も可有之哉、右等之次第別紙雛形之通り取調、来月十日迄急度宿継を以千住宿<sup>五</sup>向可差越、此状村名下令受印刻付を以早々順達留より可被相返候、

以上

これに、「風漬家其外書上帳 何村」という雛形が付けられている。関東取締出役から出されているところが注目される。

九月には「公儀触書写」として「此度江戸表大風雨ニ付材木其外諸色払底ニ而は諸人及難義候間、荷元ニ而も一己之利潤不拘商人共より注文申遣次第、江戸表諸色潤沢ニ相成候様精々心懸リ積送可申候、若直段并運賃等無謂高直ニ致し候もの有之おゐてハ可為曲事物也」と材木の値上げを禁じている（六三項）。

安政四年の「御用状留記」の正月七日には、代官所より「昨年大風雨ニ而居宅吹潰候もの共召連、来ル九日五ッ時大場隼之助宅<sup>正</sup>可罷出候」という廻状が出された（二三項）。

正月一六日には世田谷村名主松本宗八などの廻状に、「先日風漬人<sup>正</sup>被下置候御米請印帳」（七項）とあるところから、被害者に対し米が供与されたことがわかる。

さて、安政五年以降になると、「去ル辰年（安政三年）大風雨ニ付破損」した家屋等の建替願が出されている。上野毛村では正月には忠右衛門が居宅の建替を（諸事御用向留記六）（二三項）、一〇月六日には弥七が物置を（同四二項）、安政六年七月には長四郎が居宅の建替（同五七項）をそれぞれ出願した。

これらの居宅・物置の建替願いは代官所とともに鷹場管理人の鳥見役人にも提出された。

さて、安政の開国以来国内物価は上昇気味であったが、とくに米価騰貴は著しく、以後幕末にかけて大きな問題となるのである。その動向とこの時期の取締りの対応をみてみよう。

### ③ 米価高騰と取締り

安政五年の「御用状留記」の二月には江戸市中における米価高値のため、家臣の扶持米は領分・知行所より廻米し、江戸表で購入しないように命じている（一一項、「諸事御用向留記六」三二項にも同文がある）。また「於在々米穀所持致

候ものは早々江戸表へ相廻し売捌候様可致候」ともある（一二項、同三二項）。いずれも、「公儀触書写」である。

安政七年の「御用状留記」の三月二三日には関東取締出役よりの廻状で「米価高直ニ付窮民難渋ニおよひ候趣相聞候も酒造半高造と被仰出候」として「不取留風聞相立不正之取計可致と企候族も有之哉相聞以之外不埒之事ニ候」と示達している（三八項）。

八月一四日にも関東取締出役より「米価高直ニ付而は別而融通宜敷萬民難義不致様実意ニ可被取計之処、奸商共其身之利欲耽り右躰買メ等いたし候段以之外不埒之至リニ候追々尚出役共廻村之上夫々及探索、事實買メ・糶買等致候もの有之候ハ、召捕糺之上御奉行衆ニ可差出条、此段早々組合村々及通達心得違無之様小前末々迄無洩落能々可申論候」とある（二〇項）。安政五年（一八五四）の日米修交通商条約前後より急速に米価高騰となり以後幕末にかけて増々暴騰し、ついに米価引きさげを要求の一つに掲げる「世直し」一揆が発生する要因の一つになるのである。

### （3）江戸屋敷下肥の新仕法反対闘争

嘉永五年の「御用書筆記」の六月朔日には用賀村名主麻次郎から「下掃除一件之儀ニ付御一同様ニ御集評願奉存候間（中略）、来六日上町幸右衛門方正九ッ時揃ニ乍御苦勞様御出勤御頼申上候」（四七項）という廻文が出されているが、その内容については未詳である。

嘉永七年の「御用諸向留」の二月二二日には、代官所から用賀・野良田・瀬田・上野毛・岩戸・猪方・和泉の七か村に対し、「明廿三日朝上町可罷出、尤今度掃除之一条ニ付、何歟見当ニ可相成書物写等取調持参可有之候、勿論下掃除世田谷江被下御連上町豆掃溜等之発端之御尋ニ付而之事故、相考近年伝三右衛門願出候節之儀等も御尋ニ御座候」とある（二三項）。

安政二年の「御用向留記」の正月二六日には用賀村名主麻次郎から「此度八町堀下掃除之義ニ付御集評御願申度義御座候間、乍御苦勞明廿七日正四ッ時迄ニ上町幸右衛門方<sup>五</sup>御出勤可被下候」とある（五項）。

安政三年の「御用状留記」の三月一〇日にも用賀村麻次郎から「下掃除之義ニ付願書差上度義御座候間、明朝五ッ時迄ニ無間違上町幸右衛門方<sup>五</sup>御出勤可被下候」とある（一五項）。

安政五年の「御用状留記」の二月二八日には野良田村与一右衛門から「千田谷御屋敷御作園肥し之義ニ付、先達而惣代を以願面差上候処御利解有之又々再願仕度候間、明廿九日朝五ッ時迄ニ乍御苦勞様上宿宗八殿宅<sup>五</sup>御出張、願面御披見之上御調印可被成候、尚明廿九日惣代ヲ以下拙共、御屋敷様<sup>五</sup>願面持参可致候」とある（九項）。

この時の願書が「諸事御用向留記六」の安政五年二月に収録されている（四六項）。そこには「御領分村々惣代」として世田谷村名主松本宗八・用賀村名主飯田麻次郎・野良田村名主粕谷与一右衛門・八幡山村名主嶋田權藏・瀬田村名主長崎長十郎・上野毛村名主田中七左衛門から代官所へ差出したものである（四六項）。それによると、「御屋鋪様下掃除往古<sup>五</sup>世田谷御領分村々<sup>五</sup>格別之以、御仁恵ヲ田畑為養頂戴被、仰付罷在冥加至極難有仕合奉存候、然処千田谷御屋敷御菜園御用下糞駄数上納罷在候処、今般上納仕来之外附送り賃錢共見込場所<sup>ニ</sup>而相渡候様被、仰出奉畏候、然所前々<sup>五</sup>御領分村々<sup>ニ</sup>而頂戴仕候為冥加附送<sup>リ</sup>上納罷在候義ニ御座候、然<sup>ニ</sup>今般新規御仕法替被、仰付候<sup>而</sup>ハ近來養肥弘底之義ニ付甚難渋仕候間、幾重<sup>ニ</sup>も往古仕来之通り被成下置候様奉願上候、右願之通り御聞濟被成下置候ハ、村々一同難有仕合奉存候、以上」というものである。その要点は、江戸の井伊家の屋鋪の下掃除は昔より世田谷御領分村々が格別の御仁恵で行ない、田畑の肥料としてきた。ところが千田屋御屋敷の御菜園ができたので、そちらの方へ相当数（一三五駄）の下糞を上納するようになった。今般これまでの上納の方法を変更して、千田屋御屋敷御菜園に附送る下糞の賃錢を徴収することとなった。しかし、これに對して、前々より「御領分村々<sup>ニ</sup>而頂戴仕候」冥加と

して千田谷屋敷菜園へ肥料を世田谷領村々で上納してきたものである。それ故、これまでどおりにしていたと云々という願意である。

これをもう少し具体的に考ええると千田谷屋敷菜園の肥料は井伊家が独自でやるので世田谷領村々から手を引かせ、その運賃だけを負担せよという意味であろうか。この願書は却下されたので再度書き改めて安政五年三月一〇日付で代官所へ再提出したのが次の「再歎願書」である（四七項）。これには「御領分村々惣代」には、前回の八幡山村名主嶋田権蔵にかわつて弦巻村名主鈴木安太郎が入り、他は同一である。ここでは具体的に問題点を二つ指摘している。

一つは安政四年一二月から千田谷菜園の「御用肥」を世田谷領村々の「御百姓共」に附送り相止め、御手人<sup>ニ</sup>御引取<sup>ニ</sup>罷成候趣を以、先規仕来之外附送り賃錢見込場所<sup>ニ</sup>而相渡候様被<sup>ニ</sup>仰付候所<sup>ニ</sup>として、これに対し具体的に反論している。すなわち「是迄下肥し百三拾五駄附送り之義ハ、御百姓共早朝 御屋敷<sup>五</sup>罷出千田谷御屋敷<sup>五</sup>附送り候上、直様引返し下掃除附戻候義<sup>ニ</sup>付、唯々御百姓共骨折候<sup>而</sup>御用相動来農薬丹精罷在候義<sup>ニ</sup>付、賃錢<sup>五</sup>杯ト申義ハ毛頭無御座候、然<sup>ニ</sup>今般御屋敷内<sup>ニ</sup>而往古仕来之外持送り賃錢として余分<sup>ニ</sup>下肥し御取立之義ハ勿論、是迄附送り相止め賃錢<sup>ニ</sup>而上納仕候義、右両様共新規御仕法替<sup>ニ</sup>罷成候<sup>而</sup>御百姓共甚難波至極、耕作実り方<sup>ニ</sup>拘り実以困窮之基<sup>ニ</sup>歎敷奉存候<sup>ニ</sup>とあり、以下強く撤回を要求したものである。百姓は早朝に江戸屋敷から千田谷菜園へ下糞を附送ったが、それは百姓共の骨折で「賃錢杯と申義ハ毛頭無御座候」というところに、いいしれぬ怒りが表現されている。

安政五年七月七日に三度目の「歎願書」を提出した（四八項）。そこには「久昌院様（井伊直孝） 御拝領以來厚 御憐愍を以下掃除頂戴被<sup>ニ</sup>仰付<sup>ニ</sup>られたと根元にさかのぼり、さらに「乍恐千田谷御屋鋪御菜園より年々上納方之品御領分<sup>ニ</sup>而上納仕、如何様<sup>ニ</sup>も御益方<sup>ニ</sup>相成候様村々役人共<sup>ニ</sup>而御用相動、千田谷御屋敷御作園乍恐御止切<sup>ニ</sup>被成下置候様奉願上候、都<sup>而</sup>新規之御沙汰被<sup>ニ</sup>仰出候<sup>而</sup>ハ乍恐小前之もの共人氣合<sup>ニ</sup>相拘り候哉と奉存候<sup>ニ</sup>とあり、千田谷菜園の廃

止と新規の沙汰は小前の反感を生み、重大な事態はまねくと強い態度に出ている。結末は農民側の要求が貫徹されたことが次の一文でわかる（四八項）。

右歎願書佐野 御奉行勝五兵衛様江奉差上候所、書面之通り実以御百姓共難渋之義勝様御骨折御申立被下置候ニ付、御聞濟ニ相成村々一同難有仕合奉存候事

文久二年七月には、この問題が再燃し「今般御中敷下々御長屋通下掃除場所ニ而相渡候様御沙汰御座候処、御領分御百姓共難渋至極仕候付、安政五年中被 仰出候付其節奉歎願候処、御聞濟被下置難有仕合奉存候、何卒今般之義も乍恐先前仕来之通被 為仰付成下置候様、幾重ニも御憐愍之御沙汰偏ニ奉願上候、以上」と御領分惣代上野毛村名主田中七左衛門はか五名の各村名主連名で代官所へ提出した（七八項）。この結末についてはここでは未詳である。

#### （4）宇奈根村処罰者赦免願いと瀬田村渡船騒動

##### ① 宇奈根村処罰者赦免願

前稿で述べたように、宇奈根村では嘉永二年（一八四九）同村百姓新次郎が名主役に任命されると、年寄役勇次郎と倅鎌之助が中心となり、村人の大半を味方に引込み、名主新次郎排斥の村方騒動が発生した。しかし嘉永四年二月には反新次郎側が敗訴となり、多くの者が処罰された。なかでも指導的役割を果たした勇次郎と倅鎌之助は田畑・家屋敷闕所の上、「彦根御領分五郡・佐野・世田谷御領分・江戸御構追放」となった。

「諸事御用向留記六」の安政五年五月二六日には世田谷村名主松本宗八等八か村の名主が連名して代官所に対し、「九ヶ年以前宇奈根村混雜仕候砌心得違之もの共夫々御咎メ被 仰付奉忍入、他所ニ而相憚罷在候、尤勇次郎・鎌之助兩人之義ハ追々老衰且病身ニ罷成歩行等も不相叶、一同朝暮相歎キ先非後悔仕罷在候段何共歎敷次第ニ奉存候、然



所今般 久昌院様 御年回ニ付 御赦被 仰出候趣奉承知（中略）、何卒先格之御憐愍を以一同御咎メ 御免被為仰付被成下置候様偏ニ奉願上候」と赦免歎願書を提出した（四五項）。久昌院とは井伊家世田谷領主初代の井伊直孝であり、その二〇〇回忌の恩赦として出願したものであるが、「御咎メ御免不相成候事」という結果になった（関連記事は安政五年の「御用状留記」の五月三日の四三項にもある）。

それから二年後の安政七年閏三月二日に野良田村名主粕谷与一右衛門・弦巻村名主鈴木安太郎の連名で、村々名主に対して「先年宇奈根村混雜之砌、同村年寄勇次郎・鎌之助其外之もの共御咎御赦免願候義当節至極宜敷時節哉ニ愚察仕候」として、赦免願の提出を働きかけている（安政七年の「御用状留記」五二項）。その結果については未詳である。

## ② 瀬田村渡船騒動

安政五年の「御用状留記」正月二五日には世田谷村上宿松本宗八よりの廻状に「瀬田村一条ニ付明廿六日小前之もの御吟味ニ付御村々共御出勤御立会可被成と両御代官様御達しニ付、乍御苦勞様朝五ッ時遅刻無之様御出勤可被成候」とある（三項）。なお、添番として「上野毛村ニ申上候、可相成候へ、御老人様御出勤被下候様別段御達し候付此段申上候」とあり、当時八〇歳の上野毛村名主七左衛門の参加を求めている。このような騒動に際しては長老として七左衛門の存在が重きをなしていたことが予想される。

二月には、代官所に宛て瀬田村名主・年寄・与頭それに隣村村役人、用賀・野良田・上野毛・鎌田・岡本の五か村名主等から吟味取り下げの歎願書が出されている（「諸事御用向留記六」四九項）。

それによると、「今般瀬田村渡船之義ニ付村方小前之もの共騒立候ニ付、此度重立候もの共其外被 召出御吟味中ニ御座候所、全小前之もの共之内心得違ふ事起り騒立候始末之義今般 御理解奉請逸々発明奉恐入候、此上嚴重之御調

奉受候<sup>而</sup>ハ一言可申上様無御座候、今更先非後悔重々奉恐入候、然上は何卒御吟味是迄<sup>ニ</sup>而御下ヶ被成下置、出格之御慈悲之御沙汰幾重<sup>ニ</sup>も奉願上候、此上村役人并与頭共一同教諭申聞、以来小前之もの共不筋之願ハ勿論身行正路<sup>ニ</sup>農業出情可仕候<sup>ト</sup>として、騒動は小前の心得違いから生じ、小前たちが後悔しているので、吟味を取り下げてほしいと申し出ているのである。

さらに、同月小前惣代与頭一同一五名から名主・年寄に宛て「当村小前惣代与頭一同申上候、今般渡舟之義<sup>ニ</sup>付小前之者共騒立候<sup>ニ</sup>付、御上様も重立候もの共此度被 召出御吟味中、隣村御役人中<sup>ニ</sup>御猶予御願被成下一同之もの共心底御糺被成下候処、小前之もの共之内心得違之義今般 御上様御理解奉受逸々発明奉恐入候<sup>ニ</sup>付、渡舟之義ハ勿論此上嚴重之御吟味奉請候<sup>而</sup>ハ一言可申上様無御座、先非後悔奉恐入候間、御吟味是迄<sup>ニ</sup>而御下ヶ被成下置候様只管取り継御歎申上候<sup>ト</sup>と吟味取り下げ願書を提出している(五〇項)。

この二点の文書からではこの渡舟騒動の内容については、はっきりしないが、前項に続いて次のような「差上申御請書之事」という文書が掲載されている(五一項)。

それによると、「御領分瀬田村渡船大切之場所之義<sup>ニ</sup>付、村役人共<sup>ニ</sup>而取締旁請負候義仕来<sup>ニ</sup>付、去巳年(安政四年)十二月名主長十郎も組頭一同<sup>ニ</sup>申聞候所、式拾組之内拾五組之義ハ承知いたし、五組之もの共彼是申成候<sup>ニ</sup>付、名主長十郎も申論再応申聞夫々取計候之所、全承服不致右五組より事起り候哉、当正月二日小前之もの共大勢相集り、年寄五郎右衛門渡舟会所<sup>ニ</sup>取締出居候所、忠五郎・吉五郎其外之もの共罷越理不尽申之引戻し、其外之もの共儀ハ大勢名主長十郎方<sup>ニ</sup>差越渡舟村持<sup>ニ</sup>致度、押<sup>而</sup>彼は高声<sup>ニ</sup>申募騒立候段村役人共<sup>ニ</sup>申出候<sup>ニ</sup>付、重立候もの共外召出し夫々御理解之上御吟味中、一同発明致し隣村役人并村役人共<sup>ニ</sup>違<sup>而</sup>吟味下ヶ相歎候<sup>ニ</sup>付、右役人共<sup>ニ</sup>歎願申出候<sup>ニ</sup>付、吟味詰可致所、格別之憐愍を以吟味是迄<sup>ニ</sup>而相下ヶ候、然上ハ以来徒党ケ間敷義ハ勿論向後不筋之願決<sup>而</sup>不相成候段、

此段精々相心得可申候、尤渡舟之義ハ請負候義ハ不致、以来村役人共ニ出張取締方いたし、往來之もの無滯通路大切ニ懸念致し受取候賃錢之内諸入用引去り、残り残之分村方先規仕來之通り正路ニ割渡し可取計候段急度申渡候条、被仰渡逸々発明恐入承知奉畏候、依之向後村内騒立候義ハ勿論不宜所業毛頭無之様急度相慎可申候、依之村役人并与組・小前惣代一同御請印形差上申処如件」とある。

これによって「騒立」の内容と経過を次のように整理することができる。

①井伊家御領分瀬田村渡船場は重要なので、これからは村役人が管理し、経営してゆくと、安政四年一月中旬に名主長十郎より二〇組の与頭一同へ申聞せたところ、一五組は承知したが、五組は承服せず、これより「事起り候」。

②安政五年正月二日、小前のもの共が大勢集り、年寄五郎右衛門が渡舟会所へ取締のため出張していると、忠五郎・吉五郎その他の者共がやってきて「理不尽」なことを申し、その他の者共は大勢で名主長十郎方へやってきて、渡舟を「村持」にしたいと要求した。すなわち村役人等の管理・経営でなく村全体の事業にすべきだといって「騒立」した。

③そこで村役人より訴出て、反対する小前の「重立候」者も召出されて「御理解之上御吟味中」、小前たちより「吟味下ヶ相歎候ニ付」、吟味下げになった。

④渡舟については、村役人の経営とはしないで、村役人はあくまで「出張取締方いたし」、往來の者が無事通行できるように心がけ、受取った「賃錢」は必要経費を差引き、残った収入分は、これまでの村方のしきたりどおり「正路ニ割渡」すこととする。

以上判明することは、瀬田村の渡舟場経営を村役人の管理・経営下におこうとしたことに對し、小前百姓たちが、村経営とし、収入分は村全体に還元されるべきだと要求したものであり、結局小前要求を受け入れて解決したといえ

る。

安政六年の「御用留記」の七月一七日には用賀村飯田麻次郎の廻文で瀬田村慈眼寺の僧が「御登城之節 殿様<sup>江</sup>御駕籠訴いたし候」という事件が発生し、その僧の引取を命ぜられたことが触れられている。その内容は未詳であるが、領内寺院の僧が井伊直弼の江戸登城に「駕籠訴」ということは容易ならざる事件といえよう。

この嘉永五年（一八五二）から安政七年（一八六〇）の九年間は、まさに「外患内憂」にわけられたといえる。

注

- (1) この一〇冊の「御用留」は、『世田谷区史料叢書』第七卷（東京都世田谷区教育委員会、一九九二年三月発行）に収録した。小稿は、その解説論文を骨子として増補改稿したものである。本叢書の編集を担当された世田谷区立郷土資料館、とくに区専門委員池上博之氏には種々お世話になった。記して感謝の意を表するものである。
- (2) 『世田谷区史料叢書』第七卷一七七頁。
- (3) 前掲書（注2）四一三頁～四一六頁
- (4) 拙稿「開港と経済変動」（『講座日本近世史7 開国』有斐閣、一九八五年五月発行）
- (5) 『大場家歴代史』二七九頁（財団法人大場代官屋敷保存会、一九八三年一〇月発行）
- (6) 前掲書（注5）二七九頁
- (7) 拙稿「御用留」の性格と内容」（四）（『史料館研究紀要』第三号、一九九二年三月発行）